

IBM WebSphere Commerce Business Edition
IBM WebSphere Commerce Professional
Edition



追加ソフトウェア・ガイド

バージョン 5.5

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Commerce Business Edition、および Professional Edition のバージョン 5.5、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。製品のレベルにあった版を使用していることをご確認ください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Commerce Business Edition
IBM WebSphere Commerce Professional Edition
Additional Software Guide
Version 5.5

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.1

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1996, 2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

本書について

本書の内容

本書は、WebSphere® Commerce とともに提供されている追加ソフトウェア・コンポーネントの構成方法に関する情報を記載しています。WebSphere MQ および IBM® CrossWorlds® InterChange Server とともに稼働するように WebSphere Commerce を構成する方法についての情報も提供しています。WebSphere MQ および IBM CrossWorlds InterChange Server は WebSphere Commerce には付属していないので、別途購入する必要があります。

本書では、WebSphere Application Server Network Deployment で WebSphere Commerce が実行されている場合の、追加のソフトウェア・コンポーネントの構成については扱いません。

このガイドの対象読者は、システム管理者と、インストール・タスクおよび構成タスクを担当するその他全員です。

本書の更新内容

製品の最新変更に関する詳細は、WebSphere Commerce CD 1 のルート・ディレクトリにある README ファイルを参照してください。さらに、本書のコピー、および本書の更新バージョンは、以下の WebSphere Commerce Technical Library から PDF ファイルとして入手できます。

<http://www.ibm.com/software/commerce/library/>

また、本書の更新バージョンは、以下の Web サイトにある WebSphere Developer Domain の WebSphere Commerce Zone にも掲載されています。

<http://www.ibm.com/software/wsdd/zones/commerce/>

本書の更新箇所は、余白部分に記されている改訂文字によって識別できます。改訂文字について、本書では以下の規則を使用しています。

- "+" 文字は、本書の現行のバージョンで加えられた更新であることを示します。

これらの更新には、WebSphere Commerce バージョン 5.5 のフィックスパック 2 のリリースとともに提供されている追加の LDAP サーバーのサポートは含まれていません。

- "I" 文字は、本書の以前のバージョンで加えられたすべての更新箇所を示します。

これらの更新には、Linux で稼働する WebSphere Commerce バージョン 5.5 と LDAP に関する情報が含まれます。

本書で使用している規則と用語

本書では、強調表示に対して次のような規則が定められています。

太文字	コマンドを示すか、またはフィールド、アイコン、またはメニュー選択項目の名前のようなグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) コントロールを示します。
モノスペース (Monospace)	書かれているとおりに入力するテキスト例と、ファイル名、およびディレクトリー・パスとその名前を示します。
イタリック	言葉を強調する際に使用されます。さらに、ご使用のシステムで適切な値に置換する必要がある名前を示しています。



このアイコンはヒントのマークであり、タスクの実行に役立つ追加情報が示されます。

重要

これは、特に重要な情報を強調表示した項です。

注意

これは、データの保護を目的とした情報を強調表示する項です。



WebSphere Commerce Business Edition に特有の情報を示します。



WebSphere Commerce Professional Edition に特有の情報を示します。



AIX® で実行するプログラムに特有の情報を示します。



OS/400® で実行するプログラムに特有の情報を示します。



Linux で実行するプログラムに特有の情報を示します。



Solaris オペレーティング環境 で実行するプログラムに特有の情報を示します。



Windows® で実行するプログラムに特有の情報を示します。



DB2 Universal Database™ に特有の情報を示します。



Oracle9i Database に特有の情報を示します。

パス変数

本書では、ディレクトリー・パスを表すのに次のような変数を使用しています。

WC_installdir

これは、WebSphere Commerce のインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の WebSphere Commerce のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

 /usr/WebSphere/CommerceServer55

 /QIBM/ProdData/CommerceServer55

 /opt/WebSphere/CommerceServer55

 /opt/WebSphere/CommerceServer55

 C:¥Program Files¥WebSphere¥CommerceServer55

WC_userdir

これは、ユーザーによる構成のために変更可能または必要とされる、WebSphere Commerce が使用するすべてのデータ用のディレクトリーです。こうしたデータの例としては、WebSphere Commerce インスタンス情報があります。このディレクトリーは、OS/400 で固有です。

WC_userdir 変数は、次のディレクトリーを表しています。

/QIBM/UserData/CommerceServer55

WAS_installdir

これは、WebSphere Application Server のインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の WebSphere Application Server のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

 /usr/WebSphere/AppServer

 /QIBM/ProdData/WebAS5

 /opt/WebSphere/AppServer

 /opt/WebSphere/AppServer

 C:¥Program Files¥WebSphere¥AppServer

CrossWorlds_installdir

これは、IBM CrossWorlds ソフトウェアのインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の IBM CrossWorlds ソフトウェアのデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

▶ AIX \$HOME/CrossWorlds

▶ Solaris \$HOME/CrossWorlds

▶ Windows C:¥CrossWorlds

ただし \$HOME は、IBM CrossWorlds Administrator のホーム・ディレクトリーです。

注: IBM CrossWorlds ソフトウェアは、iSeries™ と Linux ではサポートされません。しかし、Windowsで稼働する IBM CrossWorlds ソフトウェアは、Linux で稼働する WebSphere Commerce とともに使用できます。

VisiBroker_installdir

これは、IBM CrossWorlds VisiBroker ソフトウェアのインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の IBM CrossWorlds VisiBroker ソフトウェアのデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

▶ AIX /opt/inprise/vbroker

▶ Solaris /opt/inprise/vbroker

▶ Windows C:¥Inprise¥vbroker

注: IBM CrossWorlds VisiBroker ソフトウェアは、iSeries と Linux 上ではサポートされません。しかし、Windowsで稼働する IBM CrossWorlds VisiBroker ソフトウェアは、Linux で稼働する WebSphere Commerce とともに使用できます。

必要な知識

このガイドの対象読者は、システム管理者と、WebSphere Commerce 上でインストール・タスクおよび構成タスクを担う他の全担当者です。

WebSphere Commerce のインストールおよび構成を担当するストア開発者またはシステム管理者は、以下の分野の知識をもっていなければなりません。

- ご使用のオペレーティング・システム
- インターネット
- IBM DB2®
- WebSphere Application Server の管理コンソール
- オペレーティング・システムの基本コマンド
- 基本の SQL コマンド

目次

本書について	iii
本書の内容	iii
本書の更新内容	iii
本書で使用している規則と用語	iv
パス変数	v
必要な知識	vi

第 1 部 概要 1

第 2 部 WebSphere Commerce 分析ツール 3

第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer 5

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール	5
WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成	6
WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成	7
WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成	8
データのキャプチャーのための WebSphere Commerce の構成	11

第 2 章 IBM Tivoli Web Site Analyzer 13

IBM Tivoli Web Site Analyzer のインストール	13
--------------------------------------	----

第 3 部 WebSphere Commerce Personalization ツール 15

第 3 章 IBM WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds 17

WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds のインストール	17
LikeMinds Personalization Server を使用するための WebSphere Commerce の構成	18
LikeMinds Personalization Server のテスト	19
WebSphere Commerce マシンでの LikeMinds Administration Center の使用	20
ladmin.ear のインストール	21
LMAdminCenter プロパティ・ファイルの構成	22
LikeMinds Administration Center の始動	22
WebSphere Commerce マシンでの MovieSite サンプル・アプリケーションの使用	23
moviesite.ear のインストール	23
MovieSite プロパティ・ファイルの構成	24
MovieSite サンプル・アプリケーションの始動	25

第 4 部 WebSphere Commerce のコラボレーション・フィーチャー 27

第 4 章 WebSphere Commerce カスタマー・ケア 29

カスタマー・ケアのインストールおよび構成	29
Lotus Sametime のインストール	30
Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール	30
AIX、Solaris、および Windows における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール	31
OS/400 における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール	33
Lotus Sametime 自己登録フィーチャーの構成	37
次のステップ	39

第 5 章 WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース 41

コラボレイティブ・ワークスペースのインストールおよび構成	42
Lotus QuickPlace のインストール	42
WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール	43
WebSphere Commerce と同じ LDAP サーバーを使用するための Lotus QuickPlace の構成	43
WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール	44
Lotus Domino での Java サブレット・サポートの使用可能化	47
Lotus QuickPlace と併用するための WebSphere Commerce の構成	48
オプションの構成	49
Lotus QuickPlace 用テンプレートの作成	49
E メール通知のセットアップ	49
UTF-8 の使用のための Lotus QuickPlace の構成	50
次のステップ	50

第 6 章 ストアでのコラボレーション・コンポーネントの使用可能化 51

第 5 部 WebSphere Commerce ビジネス・インテグレーション・アダプター 53

第 7 章 WebSphere MQ 55

WebSphere MQ のインストール	56
MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の確認	57

WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成	58	+ IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのための WebSphere Commerce の準備	87
WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成	60	+ Microsoft Windows 2000 Active Directory のための WebSphere Commerce の準備	88
JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別	60	WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP の使用可能化	91
WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成	61	+ IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ	93
WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成	64	+ IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ	93
WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成	66	+ Microsoft Windows 2000 Active Directory のために WebSphere Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステップ	94
ご使用の WebSphere MQ 構成のテスト	66	+ Sun ONE Directory Server 5.0 のために WebSphere Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステップ	94
追加の WebSphere MQ 資料	67	+ LDAP で使用するためのサンプル・ストア・アーカイブの更新	95
第 8 章 IBM CrossWorlds InterChange Server	69	WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの使用可能化	96
CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターの構成	69	+ マイグレーションのための WebSphere Commerce のデータベース・エントリーの変更	96
CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターに関する前提条件	70	+ WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの有効化	97
永続的 ORB 間参照ファイルの生成のための IBM CrossWorlds InterChange Server の構成	71	+ LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能化	98
WebSphere Commerce マシンへの IBM CrossWorlds ファイルのコピー	72	+ WebSphere Commerce での LDAP のテスト	99
WebSphere Application Server クラスパスへの IBM CrossWorlds JAR ファイルの追加	73		
IBM CrossWorlds 接続の使用可能化	74		
次のステップ	76		
<hr/>		第 11 章 WebSphere Commerce で LDAP を使用不可にする	101
第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce	77		
第 9 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリー・サーバーの構成	79	第 7 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント 103	
WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成	80	第 12 章 WebSphere Application Server Network Deployment	105
+ WebSphere Commerce で使用するための IBM Lotus Domino LDAP サービスの構成	80	WebSphere Application Server Network Deployment のインストール	105
WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成	81	WebSphere Commerce での統合およびクラスタリング	105
IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加	81		
ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成	82	第 13 章 WebSphere Application Server Network Deployment Edge Component	107
+ WebSphere Commerce で使用するための Microsoft Windows 2000 Active Directory の構成	84		
+ WebSphere Commerce で使用するための Sun ONE Directory Server 5.0 の構成	84	第 14 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit	109
次のステップ	85	WebSphere Commerce 症状データベース	109
第 10 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成	87		
+ WebSphere Commerce の準備	87	<hr/>	
		第 8 部 IBM DB2 Text Extender バージョン 8	111

**第 15 章 IBM DB2 Text Extender パ
ージョン 8 のインストール 113**

第 9 部 追加ソフトウェア・タスク 115

**第 16 章 WebSphere Commerce のタ
スク 117**

WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動 . . . 117
AIX、Linux、および Solaris オペレーティング
環境での WebSphere Commerce 構成マネー
ジャーの起動 117
OS/400 での WebSphere Commerce 構成マネー
ジャーの起動 119
Windows での WebSphere Commerce 構成マネー
ジャーの起動 121
WebSphere Commerce インスタンスの始動または停
止 121
WebSphere Commerce Payments インスタンスの始
動または停止 122

**第 17 章 WebSphere Application
Server のタスク 123**

アプリケーション・サーバーの始動および停止 . . . 123
AIX、Linux、および Solaris オペレーティング
環境 Linux でのアプリケーション・サーバーの
始動または停止 123

OS/400 でのアプリケーション・サーバーの始動
および停止 124
Windows でのアプリケーション・サーバーの始
動および停止 125
WebSphere Application Server 管理コンソールの始
動 126
OS/400 WebSphere Application Server サブシステム
の始動. 126

第 10 部 付録 129

付録. 詳細情報の入手方法 131

WebSphere Commerce の情報 131
WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ. . . 131
WebSphere Commerce Technical Library. . . . 131
WebSphere Application Server 131
WebSphere Application Server Network Deployment 131
WebSphere Application Server Edge Component . . 132
その他の IBM 資料 132

特記事項. 133

商標 134

第 1 部 概要

WebSphere Commerce には、WebSphere Commerce とともに使用できるオプションのソフトウェア・パッケージがいくつか組み込まれています。それらのパッケージのインストールと構成の手順の詳細は、以下に示す項を参照してください。

- 3 ページの『第 2 部 WebSphere Commerce 分析ツール』
- 15 ページの『第 3 部 WebSphere Commerce Personalization ツール』
- 27 ページの『第 4 部 WebSphere Commerce のコラボレーション・フィーチャー』
- 53 ページの『第 5 部 WebSphere Commerce ビジネス・インテグレーション・アダプター』
- 77 ページの『第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce』
- 103 ページの『第 7 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント』
- 111 ページの『第 8 部 IBM DB2 Text Extender バージョン 8』

これらの製品は、WebSphere Commerce インスタンスの作成の前または後でインストールできます。

第 2 部 WebSphere Commerce 分析ツール

WebSphere Commerce には、WebSphere Commerce を操作するにあたりさまざまな面を分析できる強力なツールが備えられています。こうしたツールの詳細については、以下の章を参照してください。

- 5 ページの『第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer』
- 13 ページの『第 2 章 IBM Tivoli Web Site Analyzer』

第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer

IBM WebSphere Commerce Analyzer は、オプションでインストール可能な WebSphere Commerce のフィーチャーです。WebSphere Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce を使用して作成したオンライン・ストアに関する事前定義のビジネス・レポートを生成します。ビジネス・レポートは、マーケティングの販売促進の効果と商品販売に関する情報を提供します。マーケティング・マネージャーは、WebSphere Commerce アクセラレーター からビジネス・レポートにアクセスできます。ビジネス・レポートに加えて、WebSphere Commerce Analyzer は履歴データに対してデータ・マイニングを実行して、オンライン・ショッパーの傾向と特性を識別して、このデータを顧客プロファイルとして WebSphere Commerce システムに戻します。

インストールおよび構成の際に、WebSphere Commerce Analyzer はデータベースに基づくデータマートおよび制御データベースを WebSphere Commerce Analyzer サーバー上に作成します。これらのデータベースは、ビジネス・レポートの生成に必要な情報を格納するために使用されます。

WebSphere Commerce Analyzer データマートは Windows 上の DB2 Universal Database 形式ですが、任意の WebSphere Commerce データベースからデータを抽出できます。データを Oracle9i Database の WebSphere Commerce データベースから抽出する場合、DB2 Information Integrator バージョン 8.1 (以前は DataJoiner[®] と呼ばれていた) を購入する必要があります。データを @server[®] iSeries の WebSphere Commerce データベースから抽出する場合、DB2 DataPropagator[™] for iSeries バージョン 8.1 (5722DP4) を購入する必要があります。Oracle9i データベースまたは @server iSeries からの抽出のセットアップに関する詳細については、「WebSphere Commerce Analyzer インストールと構成ガイド」を参照してください。

WebSphere Commerce データベースが Oracle9i である場合、Oracle データベースに対して DB2 Universal Database の複製を許可する DB2 Information Integrator を購入する必要があります。

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール

WebSphere Commerce で WebSphere Commerce Analyzer を使用するには、次のようにします。

1. IBM WebSphere Commerce Analyzer をインストールして構成します。詳細は、6 ページの『WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成』を参照してください。

400 必要なすべてのフィックスがインストールされているか確認してください。特に、iSeries の WebSphere Commerce から複製する場合、必ず APAR I113348 を読んで、最新のすべてのフィックスを 5722DP4 のインストールに適用しなければなりません。

2.  WebSphere Commerce Analyzer マシンで、DB2 Universal Database コマンド行から以下のコマンドを発行します。

```
db2jstrt port_number
```

ここで、*port_number* は、8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』のステップ17 (10 ページ)で使用されているポート番号です。

3. WebSphere Commerce を実行しているオペレーティング・システムに応じて、次のようにします。

-     WebSphere Commerce マシン上に、WebSphere Commerce Analyzer の新規データ・ソースを作成します。詳細は、7 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』を参照してください。

-  WebSphere Commerce マシン上に、WebSphere Commerce Analyzer 用の新しい JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースを作成します。詳細は、8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』を参照してください。

4. データをキャプチャするように WebSphere Commerce を構成します。詳細は、11 ページの『データのキャプチャのための WebSphere Commerce の構成』を参照してください。

5. WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成の詳細は、「*WebSphere Commerce Analyzer* インストールと構成ガイド」を参照してください。「*WebSphere Commerce Analyzer* インストールと構成ガイド」は、install.pdf という名前の PDF ファイルとして用意されており、IBM WebSphere Commerce Analyzer CD 中の *locale* ディレクトリに置かれています (ただし *locale* は、ご使用のマシンが使用する言語環境のロケール・コードであり、たとえば米国英語のロケールは en_US です)。

| WebSphere Commerce Analyzer は Linux 上では稼働しません。Linux 上で稼働する WebSphere Commerce とともに WebSphere Commerce Analyzer を使用するには、Windows を稼働するマシンに WebSphere Commerce Analyzer をインストールしてください。

重要

パフォーマンスの問題のため、および WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Analyzer とではソフトウェア要件が異なるため、WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Analyzer はそれぞれ異なるマシン上にインストールする必要があります。

WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成

このセクションの説明は、OS/400 で実行している WebSphere Commerce には適用されません。OS/400 で実行している WebSphere Commerce の場合、8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』の説明に従ってください。

この項のステップを完了する前に、WebSphere Commerce マシンから WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続を作成する必要があります。リモート・データベース接続を作成するには、WebSphere Commerce マシンに DB2 Administration Client がインストールされていなければなりません。DB2 Configuration Assistant を使って WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続を作成するには、次のようにします。

1. Configuration Assistant をオープンします。
2. データベース接続のリスト上で右マウス・ボタン・クリックして、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard)」を選択します。
3. 「ネットワークを検索 (Search the Network)」を選択して、「次へ」をクリックします。
4. 「システムを追加 (Add System)」をクリックして、WebSphere Commerce Analyzer データマートが存在するマシンの情報を入力します。
5. WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベースが見つかるまで、ツリーを展開します。そのデータベースを選択してから、「終了」をクリックします。

WebSphere Commerce マシン上に WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースを作成するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」を選択します。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
5. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「サーバーのブラウズ (Browse Servers)」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「OK」をクリックします。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。

- d. 「適用」をクリックします。
6. JDBC プロバイダーを一覧で示した表で、「*instance_name* - WebSphere Commerce JDBC プロバイダー」をクリックします。ここで、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

「*instance_name* - WebSphere Commerce JDBC プロバイダー」ページが表示されます。

7. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」をクリックします。「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」ページが表示されます。
8. 「新規」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
9. 「一般プロパティ (General Properties)」表の各フィールドで、次のように入力します。

名前 WebSphere Commerce Analyzer データマートの名前を入力します。

説明 データ・ソースの説明 (WebSphere Commerce Analyzer data mart など) を入力します。

データベース名

WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続の名前を入力します。

デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)

リモート・データベース接続へのアクセスに使用するユーザー ID を入力します。

デフォルト・パスワード (Default Password)

「デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)」のパスワードを入力します。

10. 「OK」をクリックします。
11. タスクバーの「保管」をクリックします。「保管」ページがオープンします。
12. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
14. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成

このセクションの命令は、OS/400 で実行している WebSphere Commerce にのみ適用されます。他のオペレーティング・システムで実行されている WebSphere Commerce の場合には、7 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』の説明に従ってください。

WebSphere Commerce ノードで WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーを作成するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce Analyzer に使用される DB2 インストールから @server iSeries マシンの以下のディレクトリーに db2java.zip をファイルをコピーします。

`WC_userdir/instances/instance_name/conf`

ここで、`instance_name` は、 WebSphere Commerce Analyzer を使用可能にしている対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

`WC_userdir` のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

2. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
3. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
4. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
5. ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**JDBC プロバイダー (JDBC Providers)**」を選択します。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
6. 以下を行って、 WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「**OK**」をクリックします。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
7. 「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページで、「**新規**」をクリックします。「新規 JDBC プロバイダー (New JDBC Provider)」ウィザードを開始します。
8. 「**JDBC プロバイダー (JDBC Providers)**」フィールドから「**DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)**」を選択し、「**OK**」をクリックします。「DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)」ページが表示されます。
9. 「**クラスパス (Classpath)**」フィールドに、すでに @server iSeries マシンにコピーしてある db2java.zip ファイルへの完全パスを入力します。パスは、次のようにしてください。

`WC_userdir/instances/instance_name/conf/db2java.zip`

ここで、`instance_name` は、 WebSphere Commerce Analyzer を使用可能にしている対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

`WC_userdir` のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

10. 「適用」をクリックします。「DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)」ページが最新表示されます。
11. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」をクリックします。「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」ページが表示されます。
12. 「新規」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
13. 「一般プロパティ (General Properties)」表の各フィールドで、次のように入力します。

名前 WebSphere Commerce Analyzer データマートの名前を入力します。

説明 データ・ソースの説明 (WebSphere Commerce Analyzer data mart など) を入力します。

データベース名

WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベースの名前を入力します。

デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)

WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベース接続へのアクセスに使用するユーザー ID を入力します。

デフォルト・パスワード (Default Password)

「デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)」のパスワードを入力します。

14. 「適用」をクリックします。ページが最新表示されます。
15. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「カスタム・プロパティ」をクリックします。「カスタム・プロパティ」ページが表示されます。
16. 「カスタム・プロパティ」ページで、「portNumber」をクリックします。「portNumber」ページが表示されます。
17. 「portNumber」ページの「値」フィールドに、5 ページの『IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール』のステップ 2 (6 ページ) で db2jstrt コマンドを発行する際に指定したポート番号を入力します。
18. 「OK」をクリックします。「カスタム・プロパティ」ページが表示されず。
19. 「カスタム・プロパティ」ページで、「新規」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
20. 「新規」ページで、次のように各フィールドを完成させます。

名前 次の値を入力します。

serverName

値 WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベース・ノードの完全修飾 TCP/IP ホスト名を入力します。

21. 「OK」をクリックします。
22. タスクバーの「保管」をクリックします。「保管」ページがオープンします。
23. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
24. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。

25. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

データのキャプチャーのための WebSphere Commerce の構成

ユーザー・トラフィックが開始する前に、WebSphere Commerce 構成マネージャー内の **UserTrafficEventListener**、**CampaignRecommendationStatisticsListener** および **CampaignRecommendationListener** コンポーネントを使用可能にしなければなりません。これらのコンポーネントが使用可能になっていない場合、ビジネス・レポートによってはデータが示されないこととなります。

データのキャプチャーのために WebSphere Commerce を構成するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動の詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「商取引 (**Commerce**)」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「コンポーネント」を展開します。
5. 「**CampaignRecommendationListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
6. 「**UserTrafficEventListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
7. 「**CampaignRecommendationStatisticsListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
8. 「コンポーネント」を縮小表示します。
9. 「**Commerce アクセラレーター**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「**WebSphere Commerce Analyzer はインストール済みか (Is WebSphere Commerce Analyzer installed?)**」では、「はい」を選択します。

- b. 「レポート文書ルート (**Reports Document Root**)」フィールドに、WebSphere Commerce Analyzer が生成するレポートを保存するパスを入力します。このフィールドに入力するパスは、WebSphere Commerce インスタンスのルート・パスの最後に追加されます。

デフォルト・パスは次のようになっています。

 `WC_installdir/instances/instance_name/WCA/reports`

 `WC_userdir/instances/instance_name/WCA/reports`

 `WC_installdir/instances/instance_name/WCA/reports`

 `WC_installdir/instances/instance_name/WCA/reports`

 `WC_installdir¥instances¥instance_name¥WCA¥reports`

ただし `instance_name` は、WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

`WC_installdir` および `WC_userdir` のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

- c. 「**IBM DB2 Intelligent Data Miner for Data はインストール済みか (Is IBM DB2 Intelligent Data Miner for Data Installed?)**」フィールドで、WebSphere Commerce Analyzer データベースに DB2 Intelligent Data Miner for Data がインストールされている場合は「はい」を選択します。IBM DB2 Intelligent Data Miner のインストールは、WebSphere Commerce Analyzer のインストールおよび構成のオプションです。
- d. 「**WCA DataSource**」フィールドには、WebSphere Commerce を実行しているオペレーティング・システムに応じて次のいずれかを実行します。
-     7 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』のステップ 9 (8 ページ) で入力した、WebSphere Commerce Analyzer データ・ソースの名前を入力します。
 -  8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』のステップ 13 (10 ページ) で入力した、WebSphere Commerce Analyzer データ・ソースの名前を入力します。
- e. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
10. 構成マネージャーを終了します。

第 2 章 IBM Tivoli Web Site Analyzer

IBM Tivoli® Web Site Analyzer は、Web サイトの使用状況、正常性、保全性、およびサイトのコンテンツを取り込んで、分析し、さらには保存してレポートする強力なツールです。IBM Tivoli Web Site Analyzer は、訪問者サイトの相互作用およびサイト全体のパフォーマンスの解決に役立ちます。この特色を利用して、サイトに対する顧客の忠実性およびビジネス効果を最適化できます。

IBM Tivoli Web Site Analyzer に関する詳細は、IBM Tivoli Web Site Analyzer Web サイトを参照してください。

<http://www.ibm.com/software/sysmgmt/products/web-site-analyzer.html>

WebSphere Commerce は、IBM Tivoli Web Site Analyzer バージョン 4.2 をサポートします。

IBM Tivoli Web Site Analyzer のインストール

IBM Tivoli Web Site Analyzer インフォメーション・センターにある解説に従って IBM Tivoli Web Site Analyzer をインストールして構成してください。インフォメーション・センターは、次の Web サイトから使用できます。

<http://publib.boulder.ibm.com/tividd/td/IBMTivoliWebSiteAnalyzer4.2.html>

重要

WebSphere Commerce と IBM Tivoli Web Site Analyzer とではソフトウェア要件が異なるため、WebSphere Commerce と IBM Tivoli Web Site Analyzer はそれぞれ異なるマシン上にインストールする必要があります。

第 3 部 WebSphere Commerce Personalization ツール

第 3 章 IBM WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds

LikeMinds Personalization Server は、協調フィルタリング・テクノロジーを使用して、Personalization ソリューションを提供します。これは、両方のユーザーの明示的なレーティング (明示的なプロファイル) と以下のような暗黙的ユーザー動作を使用して、ユーザー・プロファイルを作成します。

- 商品の購入
- ショッピング・カートに追加、またはそこから除去したアイテム
- ナビゲーション・ヒストリー

LikeMinds Personalization Server 協調フィルタリング・テクノロジーは、既存の WebSphere Commerce ルール・ベース Personalization オファリングを補完します。これは、クライアント・コンポーネント、サーバー・コンポーネント、およびデータベースから成ります。

WebSphere Commerce は、デフォルトで LikeMinds Personalization Server のクライアント・コンポーネントを WebSphere Commerce マシンにインストールします。

WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds のインストール

LikeMinds Personalization Server のサーバー・コンポーネントをインストールして構成するには、LikeMinds README ファイルおよび「LikeMinds Installation Guide」を参照してください。README ファイルは WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD のルート・ディレクトリーにあり、LikeMinds Installation Guide は /likeminds/docs ディレクトリーにあります。

注:

1. LikeMinds Personalization Server がサポートしている操作環境は、Windows NT[®]、AIX、または Solaris だけです。
2. LikeMinds Personalization Server は、AIX 5.1 ではサポートされていませんが、AIX 4.3.3 にインストールすることはできます。
3. LikeMinds Personalization Server は、DB2 Universal Database バージョン 7.2、FixPak 4 のみをサポートします。

LikeMinds Personalization Server のサーバー・コンポーネントを使用するには、「Customization Guide」および「API Guide」を参照してください。これらの文書は、WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD の /likeminds/docs ディレクトリーにあります。

LikeMinds Personalization Server のサーバー・コンポーネントをインストールして構成した後、次のセクションの説明に従って、LikeMinds Personalization Server を使用するように WebSphere Commerce を構成します。

- 『LikeMinds Personalization Server を使用するための WebSphere Commerce の構成』
- 19 ページの 『LikeMinds Personalization Server のテスト』

WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD に収められている LikeMinds Administration Center と MovieSite サンプル・アプリケーションは、 WebSphere Commerce でサポートされているアプリケーション・サーバーである WebSphere Application Server 5.0 上で稼働するように設計されていません。 LikeMinds Administration Center と MovieSite サンプル・アプリケーションを WebSphere Application Server 5.0 上で使用するには、以下の項を参照してください。

- 20 ページの 『WebSphere Commerce マシンでの LikeMinds Administration Center の使用』
- 23 ページの 『WebSphere Commerce マシンでの MovieSite サンプル・アプリケーションの使用』

LikeMinds Administration Center と MovieSite サンプル・アプリケーションに関するその他の詳細は、 WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD 内の LikeMinds Personalization LikeMinds Personalization Server の資料を参照してください。

LikeMinds Personalization Server を使用するための WebSphere Commerce の構成

LikeMinds Personalization Server をインストールして構成した後、 LikeMinds Personalization Server を使用するには、以下のようにして WebSphere Commerce を使用可能にする必要があります。

1. WebSphere Commerce を停止します。 WebSphere Commerce の停止の詳細は、121 ページの 『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』 を参照してください。
2. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの 『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』 を参照してください。
3. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
4. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「コンポーネント」 → 「WCSEventMonitor」 を展開します。

ここで、*host_name* は WebSphere Commerce を実行しているマシンの短縮名で、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

5. 「一般」 ページで、「コンポーネント使用可能」 チェック・ボックスを選択します。
6. 「拡張」 タブをクリックして、「拡張」 ページに切り替えます。
7. 「拡張」 ページで、「開始」 チェック・ボックスを選択します。
8. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「外部サーバー・リスト」 → 「LikeMinds」 を展開します。

ここで、*host_name* は WebSphere Commerce を実行しているマシンの短縮名で、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

9. 「デフォルト・サーバー名」フィールドに、LikeMinds Personalization Server マシンの完全修飾されたホスト名を入力します。たとえば、次のようになります。likeminds.torolab.ibm.com。LikeMinds Personalization Server を WebSphere Commerce と同一のマシン上にインストールした場合には、このフィールドは既に正しく記入されているはずです。
10. 次のようにして、LikeMinds Personalization Server の正しい情報が WebSphere Commerce データベースの LMSERVER データベース・テーブルにあることを確認します。
 - a. WebSphere Commerce データベースで使用するデータベース管理システムに応じて、DB2 コマンド・セッションまたは Oracle SQL*Plus セッションを開始します。
 - b. WebSphere Commerce データベースに接続します。
 - c. 次の SQL クエリーを発行します。

```
select * from lmserver where LMENGINETYPE='ClickstreamEngine';
```
 - d. クエリーの結果に応じて、次のようにします。
 - クエリーが何も戻さない場合には、次の SQL コマンドを発行します。

```
insert into lmserver
(LMSERVER_ID, STOREENT_ID, HOSTNAME, PORT, LMENGINENAME, LMENGINETYPE,
LMSETNAME)
values
(0,0,'LikeMinds_hostname',2620,'wcsClickStreamEng', 'ClickstreamEngine',
'wcsTransactions');
```

ここで、*LikeMinds_hostname* は LikeMinds Personalization Server マシンの完全修飾されたドメイン名です。
 - クエリーが 1 レコードを戻し、ホスト名が無いか LikeMinds Personalization Server マシンのホスト名と一致しない場合には、次の SQL コマンドを発行します。

```
update lmserver
set hostname='LikeMinds_hostname', port=2620
where LMENGINETYPE='ClickstreamEngine';
```

ここで、*LikeMinds_hostname* は LikeMinds Personalization Server マシンの完全修飾されたドメイン名です。
 - e. DB2 コマンド・セッションまたは Oracle SQL*Plus セッションを終了します。
11. WebSphere Commerce を始動します。WebSphere Commerce の始動の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

LikeMinds Personalization Server のテスト

LikeMinds Personalization Server を使用するように WebSphere Commerce を構成し、WebSphere Commerce にサンプル・ストアを発行した後、次のようにして LikeMinds Personalization Server をテストできます。

1. 同一のサンプル・ストアに 2 人の別個のユーザーが登録します。

2. 各ユーザーは、ストア・カタログを参照し、アイテムをショッピング・カートに追加してからストアを出ます。
3. LikeMinds Personalization Server マシン上で、次のようにします。
 - a. LikeMinds Personalization Server データベースで使用するデータベース管理システムに応じて、DB2 コマンド・セッションまたは Oracle SQL*Plus セッションを開始します。
 - b. LikeMinds Personalization Server データベースに接続します。
 - c. 次の SQL クエリーを発行します。

```
select * from lps_user_data where wcs_user_id is not null;
```

このクエリーは、サンプル・ストアに既に登録済みの 2 人の別個のユーザーの 2 つの新規レコードを表示するはずです。

- d. 次の SQL クエリーを発行します。

```
select * from lps_item_data where wcs_item_id is not null
```

このクエリーは、ユーザーがカタログで表示した、またはショッピング・カートに追加したアイテムに関連した新規レコードを表示します。

SQL クエリーが述べられているような結果を戻す場合には、インストールおよび構成は正常に行われています。

サンプル・ストアの発行に関する詳細は、WebSphere Commerce Production オンライン・ヘルプ に述べられています。

WebSphere Commerce マシンでの LikeMinds Administration Center の使用

WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD に収められている LikeMinds Administration Center は、WebSphere Application Server 3.5 と WebSphere Application Server 4.0 用に設計されています。WebSphere Commerce マシン上で LikeMinds Administration Center を使用したい場合、WebSphere Commerce マシン上に LikeMinds Administration Center をインストールする必要があります。WebSphere Commerce は、WebSphere Application Server 5.0 をサポートします。

ここでの解説では、WebSphere Application Server 5.0 を実行する WebSphere Commerce マシン上での LikeMinds Administration Center のインストールと構成の方法について説明しています。

WebSphere Commerce マシン上で LikeMinds Administration Center を使用するには、次のようにします。

1. ladmin.ear をインストールします。詳細は、21 ページの『ladmin.ear のインストール』を参照してください。
2. LMAdminCenter のプロパティ・ファイルを構成します。詳細は、22 ページの『LMAdminCenter プロパティ・ファイルの構成』を参照してください。
3. LikeMinds Administration Center を始動します。詳細は、22 ページの『LikeMinds Administration Center の始動』を参照してください。

Imadmin.ear のインストール

WebSphere Commerce 上で Imadmin.ear をインストールするには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「**アプリケーション (Applications)**」を展開して、「**新規アプリケーションのインストール (Install New Application)**」を選択します。「アプリケーションのインストールの準備 (Preparing for the application installation)」ウィザードが始動します。
5. 「**ローカル・パス (Local path)**」 を選択して、 Imadmin.ear の絶対パスを入力します。 Imadmin.ear のデフォルト・ロケーションは次のとおりです。

`WC_installdir/installableApps`

`WC_Installdir` のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

パスを入力してから、「次へ」をクリックします。

6. 「アプリケーションのインストールの準備 (Preparing for the application installation)」ウィザードの次ページでデフォルト値をすべて受諾して、「次へ」をクリックします。「インストールの実行のためのオプションの提供 (Provide options to perform the installation)」 ページが、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードに表示されます。
7. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「インストールの実行のためのオプションの提供 (Provide options to perform the installation)」 ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「Web モジュール用の仮想ホストのマップ (Map virtual hosts for web modules)」 ページが表示されます。
8. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「Web モジュール用の仮想ホストのマップ (Map virtual hosts for web modules)」 ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「アプリケーション・サーバーに対するモジュールのマップ (Map modules to application servers)」が表示されます。
9. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「アプリケーション・サーバーに対するモジュールのマップ (Map modules to application servers)」 ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「要約 (summary)」 ページが表示されます。
10. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「要約 (summary)」 ページで、「終了」をクリックします。インストールが開始します。

インストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールのエラー・メッセージを確かめて、すべての問題を解決してから、`ladmin.ear` のインストールを再度試みます。

"Application LMAdminCenter installed successfully" というメッセージが表示されたら、インストールは正常に完了したということです。

11. 「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」をクリックして、「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」ページを表示します。
12. 「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」ページで、「保管」をクリックします。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。

LMAdminCenter プロパティ・ファイルの構成

`ladmin.ear` のインストールが完了したら、`lmhost.properties` ファイルを構成しなければなりません。

`lmhost.properties` ファイルを構成するには、次のようにします。

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
WAS_installdir/installedApps/server_name/  
ladmin.ear/lmservlet.war/lmhost.properties
```

ただし `server_name` は、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの名前です。デフォルトの WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーは `server1` です。

`WAS_installdir` のデフォルト値は、`v` ページの『パス変数』に一覧で示されています。

2. LikeMinds サーバーを実行するマシンのホスト名を表す次のようなエントリーを追加します。

```
host1:LikeMinds_server_hostname,LikeMinds_server_port
```

ただし `LikeMinds_server_hostname` は、LikeMinds Personalization Server サーバーの TCP/IP ホスト名、`LikeMinds_server_port` は、LikeMinds サーバーが通信に使う TCP/IP ポートです。デフォルト・ポートは 2620 です。

3. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。

LikeMinds Administration Center の始動

LikeMinds Administration Center を始動するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (`server1`) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。

4. ナビゲーション・ツリーで、「アプリケーション (Applications)」を展開して、「企業アプリケーション (Enterprise Applications)」を選択します。「企業アプリケーション (Enterprise Applications)」ページが表示されます。
5. 「LMAdminCenter」の横のボックスを選択して、「開始」をクリックします。開始すると、状況アイコンが緑の矢印に変わります。

WebSphere Commerce マシンでの MovieSite サンプル・アプリケーションの使用

WebSphere Commerce 5.5 Recommendation Engine powered by LikeMinds CD に収められている MovieSite サンプル・アプリケーションは、WebSphere Application Server 3.5 と WebSphere Application Server 4.0 用に設計されています。WebSphere Commerce マシン上で LikeMinds Administration Center を使用したい場合、WebSphere Commerce マシン上に MovieSite サンプル・アプリケーションをインストールする必要があります。WebSphere Commerce は、WebSphere Application Server 5.0 をサポートします。

この項の解説では、WebSphere Application Server 5.0 を実行する WebSphere Commerce マシン上での MovieSite サンプル・アプリケーションのインストールと構成の方法について説明しています。

WebSphere Commerce マシン上で MovieSite サンプル・アプリケーションを使用するには、次のようにします。

1. MovieSite サンプル・アプリケーションをインストールします。詳細は、『moviesite.ear のインストール』を参照してください。
2. MovieSite のプロパティ・ファイルを構成します。詳細は、24 ページの『MovieSite プロパティ・ファイルの構成』を参照してください。
3. MovieSite サンプル・アプリケーションを始動します。詳細は、25 ページの『MovieSite サンプル・アプリケーションの始動』を参照してください。

moviesite.ear のインストール

WebSphere Commerce に moviesite.ear をインストールするには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「アプリケーション (Applications)」を展開して、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」を選択します。「アプリケーションのインストールの準備 (Preparing for the application installation)」ウィザードが始動します。
5. 「ローカル・パス (Local path)」を選択して、moviesite.ear の絶対パスを入力します。moviesite.ear のデフォルト・ロケーションは次のとおりです。

`WC_installdir/installableApps`

`WC_Installdir` のデフォルト値は、`v` ページの『パス変数』に一覧で示されています。

パスを入力してから、「次へ」をクリックします。

6. 「アプリケーションのインストールの準備 (Preparing for the application installation)」ウィザードの次ページでデフォルト値をすべて受諾して、「次へ」をクリックします。「インストールの実行のためのオプションの提供 (Provide options to perform the installation)」ページが、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードに表示されます。
7. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「インストールの実行のためのオプションの提供 (Provide options to perform the installation)」ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「Web モジュール用の仮想ホストのマップ (Map virtual hosts for web modules)」ページが表示されます。
8. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「Web モジュール用の仮想ホストのマップ (Map virtual hosts for web modules)」ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「アプリケーション・サーバーに対するモジュールのマップ (Map modules to application servers)」が表示されます。
9. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「アプリケーション・サーバーに対するモジュールのマップ (Map modules to application servers)」ページで、「次へ」をクリックしてすべてのデフォルトを受諾します。「要約 (summary)」ページが表示されます。
10. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」ウィザードの「要約 (summary)」ページで、「終了」をクリックします。インストールが開始します。

インストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールのエラー・メッセージを確かめて、すべての問題を解決してから、`ladmin.ear` のインストールを再度試みます。

"Application MovieCenter installed successfully" というメッセージが表示されたら、インストールは正常に完了したということです。

11. 「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」をクリックして、「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」ページを表示します。
12. 「マスター構成への保管 (Save to Master Configuration)」ページで、「保管」をクリックします。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。

MovieSite プロパティ・ファイルの構成

`moviesite.ear` のインストールが完了したら、`MovieSite.properties` ファイルを構成しなければなりません。

`MovieSite.properties` ファイルを構成するには、次のようにします。

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
WAS_installdir/installedApps/server_name/  
moviesite.ear/msite.war/MovieSite.properties
```

ただし *server_name* は、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの名前です。デフォルトの WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーは *server1* です。

WAS_installdir のデフォルト値は、*v* ページの『パス変数』に一覧で示されています。

2. 次のようなテキストを探します。

```
lmHost
```

3. *lmHost* エントリーを次のように変更します。

```
lmHost=LikeMinds_server_hostname
```

ただし *LikeMinds_server_hostname* は、LikeMinds Personalization Server マシンの TCP/IP ホスト名です。

4. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。

MovieSite サンプル・アプリケーションの始動

MovieSite サンプル・アプリケーションを始動するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (*server1*) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「**アプリケーション (Applications)**」を展開して、「**企業アプリケーション (Enterprise Applications)**」を選択します。「企業アプリケーション (Enterprise Applications)」ページが表示されます。
5. 「**MovieSite**」の横のボックスを選択して、「**開始**」をクリックします。開始すると、状況アイコンが緑の矢印に変わります。

MovieSite が実行中であることを検査するには、ブラウザを起動して、次の URL を入力します。

```
http://hostname/MovieSite
```

第 4 部 WebSphere Commerce のコラボレーション・フィーチャー

購入合意事項の詳細情報に関するバイヤーとセラーの打ち合わせであれ、顧客の発注作業を顧客サービス担当者が援助する場合であれ、関係者の中で滑らかな意思の疎通を保つには、e-commerce コラボレーションが必要です。従来、情報交換は電話や FAX でなされてきました。WebSphere Commerce では、WebSphere Commerce アクセラレーター に含まれる 2 つの Web ベースのフィーチャーを提供することにより、e-commerce コラボレーションの機能がサポートされています。

- 29 ページの『第 4 章 WebSphere Commerce カスタマー・ケア』
-  41 ページの『第 5 章 WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース』

第 4 章 WebSphere Commerce カスタマー・ケア

WebSphere Commerce カスタマー・ケア・フィーチャーは、IBM Lotus® Sametime® サーバーを使用する同期テキスト・インターフェースを介したリアルタイム顧客サービス・サポートとして機能します。顧客はサイトにアクセスして、ストアのページにあるリンクをクリックして顧客サービス担当者 (CSR) に接続すれば、インターネットを介してこの二者間で通信またはチャットすることができます。CSR は、WebSphere Commerce アクセラレーターを介してカスタマー・ケア・インターフェースにアクセスします。さらに CSR は、顧客が助言を必用としているストア・ページを見て、ショッピング・カートおよびプロフィール情報を検索することができます。このインターフェースによって、CSR が他の CSR とチャットすることもできます。カスタマー・ケア・フィーチャーを使用するには、まず IBM Lotus Sametime をインストールして WebSphere Commerce で稼働するように構成する必要があります。

IBM Lotus Sametime は、カスタマー・ケア・コラボレーションの手段になります。これは、顧客サービス担当者とストアの顧客またはバイヤーの間で、IBM Lotus Sametime を使用して、同期テキスト・インターフェース (インスタント・メッセージング (IM)) を介した顧客サービス・リアルタイム・サポートを提供します。

Linux IBM Lotus Sametime は、Linux ではサポートされません。しかし、Windowsで稼働する IBM Lotus Sametime は、Linux で稼働する WebSphere Commerce とともに使用することができます。

カスタマー・ケアのインストールおよび構成

カスタマー・ケアをインストールして構成するには、以下のようになります。

1. (オプション) 77 ページの『第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce』の解説どおりに LDAP のインストールと構成が完了していることを確認してください。
2. Lotus Sametime をインストールします。30 ページの『Lotus Sametime のインストール』を参照してください。
3. カスタマー・ケア・コンポーネントをインストールします。30 ページの『Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール』を参照してください。
4. 必要であれば、Lotus Sametime 自己登録フィーチャーを構成します。詳細は、37 ページの『Lotus Sametime 自己登録フィーチャーの構成』を参照してください。

注: Lotus QuickPlace®、Lotus Sametime、WebSphere Commerce、および LDAP は別々のマシンにインストールしてください。

Lotus Sametime のインストール

   Lotus Sametime はスタンドアロン・サーバーとしてインストールしてください。パフォーマンス上の影響を少なくするため、Lotus QuickPlace、Lotus Sametime、WebSphere Commerce、および LDAP は別々のマシンにインストールしてください。

 Lotus QuickPlace、Lotus Sametime、WebSphere Commerce、および LDAP は別々のマシンにインストールできます。これはテスト済みで、パフォーマンス上も可能であることが分かっています。しかし競合するようであれば、Domino™ を使用して HTTP ポートを変更する必要があるかもしれません。

Lotus Sametime 3.0 では、Lotus Sametime のインストールの前に、マシン上に Lotus Domino 5.0.10 がインストールされていなければなりません。

「*Lotus Sametime* インストールガイド」の中の解説に従って Lotus Sametime をインストールおよび構成します。

「*Lotus Sametime* インストールガイド」は、Lotus Notes® データベース・ファイル (.NSF file) として製品 CD に収められています。Lotus Notes データベース・ファイルは、製品 CD の次のようなロケーションに置かれています。

Languagepack/language/data/doc/stinstall.nsf

ただし *language* は、インストール・ガイドに書かれている言語です。たとえば、英語版の「*Lotus Sametime* インストールガイド」を読むには、Lotus Notes の Lotus Sametime 製品 CD 上の次のファイルをオープンします。

Languagepack/English/data/doc/stinstall.nsf

 「*Lotus Sametime* インストールガイド」は、製品 CD のうちの 1 つに PDF ファイルで用意されています。その PDF ファイルは、2 番目の製品 CD の次のようなロケーションに置かれています。

docs/stinstall.pdf

インストール・ガイドを表示するための Lotus Notes がない場合、「*Lotus Sametime* インストールガイド」は、以下の Web サイトにある「Lotus Developer Domain のドキュメント・ライブラリー」に .PDF ファイルで掲載されています。

<http://www.lotus.com/1dd/doc>

同じ LDAP を使用するように Lotus Sametime を構成する予定の場合、必ず、Lotus Sametime と同じ LDAP サーバーを使用するように WebSphere Commerce を構成してください。

Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール

Lotus Sametime サーバーにカスタマー・ケアをインストールするための説明は、オペレーティング・システムによって異なります。ご使用のオペレーティング・システム用の説明を選択してください。

- 31 ページの『AIX、Solaris、および Windows における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール』

- 33 ページの『OS/400 における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール』

AIX、Solaris、および Windows における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール

Lotus Sametime のインストールが完了したら、カスタマー・ケア・コンポーネントをインストールおよび構成する必要があります。カスタマー・ケアをインストールして構成するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce CD 2 を CD-ROM ドライブに挿入します。
2.   必要であれば、CD-ROM ドライブをマウントします。
3. カスタマー・ケアをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

  コマンドを実行する前に、次の事柄を確認してください。

- root でログインしている。
- 作業している端末が、グラフィックスをサポートしている。

 `mount_point/CustomerCare/setup_aix`

 `mount_point/CustomerCare/setup_solaris`

 `CD-ROM_drive:¥CustomerCare¥setup.exe`

ここで、`mount_point` はマウントされる CD-ROM ドライブへのパス (`/mnt/cd0` など)、`CD-ROM_drive` は CD-ROM ドライブ名 (E など) です。

  コマンドを root で実行してください。

4. 「セットアップ言語の選択 (Choose Setup Language)」ウィンドウがオープンします。リストから言語を選択し、「OK」をクリックします。
5. 「ウェルカム」ウィンドウがオープンします。「次へ」をクリックして先に進みます。
6. 「使用許諾契約書」画面がオープンします。この画面が表示される前に、DOS ウィンドウが瞬時表示されることがありますのでご注意ください。ご使用条件をよく読み、同意するかどうかを決定してください。ご使用条件に同意すると、インストール・プログラムが継続されます。同意しない場合、インストール・プログラムは終了します。
7. 「宛先の選択」ウィンドウがオープンします。このウィンドウで、デフォルトのインストール・パスをオーバーライドできますが、デフォルト・パスをそのまま受け入れて、「次へ」をクリックします。確認ダイアログで「次へ」を再びクリックします。インストール進行状況表示バーが表示されます。

注意

可能な限りデフォルト・パスはオーバーライドしないでください。カスタマー・ケアのインストール・プログラムは、Sametime インストール・ディレクトリー内の特定の場所にアプレット・コードをコピーするよう設計されています。別のディレクトリーを選択すると、エラーになります。

8. 「セットアップが完了しました」ウィンドウがオープンします。「終了」をクリックして次に進みます。
9. ここで、WebSphere Commerce 構成マネージャー内で Lotus Sametime を使用可能にする必要があります。WebSphere Commerce マシンで、以下のようになります。
 - a. WebSphere Commerce を停止します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
 - b. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
 - c. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
 - d. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」 → 「コラボレーション」 → 「Sametime」を展開してから、以下のようになります。
 - 1) 「使用可能」チェック・ボックスを選択します。
 - 2) 「ホスト名」フィールドに、Lotus Sametime サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - 3) 「登録 URL (Registration URL)」フィールドに、Lotus Sametime サーバーのホスト名を入力します。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name/streg.nsf/  
557a6148a8f846d3852563e10000ca95?CreateDocument
```

- 4) 「アプレット・コードベース URL (Applet CodeBase URL)」フィールドに、アプレット・コードベース URL を入力します。アプレット・コードベース URL は、WebSphere Commerce カスタマー・ケアのインストール・プログラムによって作成されるアプレット・コードのロケーションです。アプレット・コードが Lotus Sametime サーバー・マシンにインストールされていることを確認してください。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name/wc
```

- 5) 必要があれば、「モニター・タイプ」、「開始タイプ」、および「セッション制限数」の選択内容を変更します。これらは、テストまたは実動環境に合ったものを選んで設定しなければなりません。

- 6) Lotus Sametime が LDAP サーバーを WebSphere Commerce として使用する場合、「**WC メンバー・サブシステムの LDAP サーバーの使用 (Use WC Member subsystem's LDAP server)**」を選択します。
- 7) 「**適用**」をクリックします。Lotus Sametime が WebSphere Commerce 用に正常に構成されたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックして、次へ進んでください。
- 8) WebSphere Commerce 構成マネージャーをクローズします。
- 9) WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

AIX、Solaris、および Windows における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのアンインストール

Windows Windows の Lotus Sametime サーバーからカスタマー・ケアをアンインストールするには、Windows のコントロールパネルの「プログラムの追加と削除」ユーティリティを使用して、アンインストール・プログラムの指示に従ってアンインストールを実行します。

AIX **Solaris** AIX または Solaris プラットフォームの Lotus Sametime サーバーからカスタマー・ケアをアンインストールするには、以下のステップに従います。

1. グラフィックスをサポートする端末から root ユーザーとしてログオンします。
2. インストールのステップ 6 で指定したディレクトリーに変更します。デフォルトでは、/domino/html/wc です。
3. 以下のコマンドを実行して、アンインストール・ディレクトリーに変更します。
cd _uninst
4. 以下のコマンドを実行してアンインストール・プログラムを起動します。

AIX ./uninstall_aix

Solaris ./uninstall_solaris

5. アンインストール・プログラムの指示に従って、アンインストールを完了します。

注: この手順では、Sametime は削除されません。Sametime の削除については、Sametime の資料を参照してください。

OS/400 における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのインストール

Lotus Sametime のインストールが完了したら、カスタマー・ケア・コンポーネントをインストールおよび構成する必要があります。カスタマー・ケアをローカルの iSeries マシン上にインストールして構成するには、以下のようになります。

1. 次のコマンドを使用して PASE シェルを入力します。
CALL QP2TERM
2. /qopt/WC55/CustomerCare ディレクトリーに変更します。
3. **setup.qsh** コマンドを送出します。
4. リストから言語を選択して、Enter を押します。

5. 0 を入力してから、Enter を押して続行します。
6. 1 を入力してから、「ウェルカム」ページで Enter を押します。
7. Enter を押して使用許諾契約書を確認します。
8. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
9. カスタマー・ケアをインストールする Domino サーバーを選択して、Enter を押します。
10. 0 を入力してから、Enter を押して続行します。
11. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
12. 「宛先 (Destination)」ページで、適切なインストール場所を選択して、Enter を押して続行します。デフォルトの場所をお勧めします。
13. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
14. 「インストールの要約 (Install Summary)」ページで、3 を入力してから Enter を押すと完了です。
15. ここで、WebSphere Commerce 構成マネージャー内で Lotus Sametime を使用可能にする必要があります。WebSphere Commerce マシンで、以下のようになります。
 - a. WebSphere Commerce を停止します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
 - b. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
 - c. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
 - d. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」 → 「コラボレーション」 → 「Sametime」を展開してから、以下のようになります。
 - 1) 「使用可能」チェック・ボックスを選択します。
 - 2) 「ホスト名」フィールドに、Lotus Sametime サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - 3) 「登録 URL (Registration URL)」フィールドに、Lotus Sametime サーバーのホスト名を入力します。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name:port_number/streg.nsf/557a6148a8f846d3852563e10000ca95?CreateDocument
```

ここで *port_number* は、カスタマー・ケアおよび WebSphere Commerce が同一のマシン上にインストールされているシステムでの、Domino サーバー用に定義されたカスタマー・ケア・インスタンスの HTTP ポートに相当します。

- 4) 「アプレット・コードベース URL (Applet CodeBase URL)」フィールドに、アプレット・コードベース URL を入力します。アプレット・コードベース URL は、WebSphere Commerce カスタマー・ケアのインストール・プログラムによって作成されるアプレット・コードのロケー

ションです。アプレット・コードが Lotus Sametime サーバー・マシンにインストールされていることを確認してください。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name:port_number/wc
```

ここで *port_number* は、カスタマー・ケアおよび WebSphere Commerce が同一のマシン上にインストールされているシステムでの、Domino サーバー用に定義されたカスタマー・ケア・インスタンスの HTTP ポートに相当します。

- 5) 必要があれば、「**モニター・タイプ**」、「**開始タイプ**」、および「**セッション制限数**」の選択内容を変更します。これらは、テストまたは実動環境に合ったものを選んで設定しなければなりません。
- 6) 「**適用**」をクリックします。Lotus Sametime が WebSphere Commerce 用に正常に構成されたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックして、次へ進んでください。
- 7) Lotus Sametime が LDAP サーバーを WebSphere Commerce として使用する場合、「**WC メンバー・サブシステムの LDAP サーバーの使用 (Use WC Member subsystem's LDAP server)**」を選択します。
- 8) WebSphere Commerce 構成マネージャーをクローズします。
- 9) WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

カスタマー・ケアを Windows からリモートの iSeries マシンにインストールして構成するには、次のようにします。

1. Windows マシンで、DOS プロンプト・ウィンドウをオープンします。
2. **setup.exe -os400** コマンドを送出します。
3. ターゲット・マシンおよびユーザー ID、パスワードを、iSeries ログオン・ウィンドウで指定します。「**次へ**」をクリックして先へ進みます。
4. 「セットアップ言語の選択 (Choose Setup Language)」ウィンドウがオープンします。リストから言語を選択し、「**OK**」をクリックします。
5. 「ウェルカム」ウィンドウがオープンします。「**次へ**」をクリックして先に進みます。
6. 「使用許諾契約書」画面が表示されます。「使用許諾契約書」が表示される前に、DOS ウィンドウが少しの時間表示されることがありますのでご注意ください。ご使用条件をよく読み、同意するかどうかを決定してください。ご使用条件に同意すると、インストール・プログラムが継続されます。同意しない場合、インストール・プログラムは終了します。
7. カスタマー・ケアをインストールする Domino サーバーを選択して、「**次へ**」をクリックして先に進みます。
8. ここで、WebSphere Commerce 構成マネージャー内で Lotus Sametime を使用可能にする必要があります。WebSphere Commerce マシンで、以下のようになります。
 - a. WebSphere Commerce を停止します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

- b. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
- c. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
- d. *host_name* → 「**商取引 (Commerce)**」 → 「**インスタンス・リスト**」 → *instance_name* → 「**インスタンス・プロパティ**」 → 「**コラボレーション**」 → 「**Sametime**」を展開してから、以下のようにします。
 - 1) 「**使用可能**」チェック・ボックスを選択します。
 - 2) 「**ホスト名**」フィールドに、 Lotus Sametime サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - 3) 「**登録 URL (Registration URL)**」フィールドに、 Lotus Sametime サーバーのホスト名を入力します。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name:port_number/streg.nsf/  
557a6148a8f846d3852563e10000ca95?CreateDocument
```

ここで *port_number* は、カスタマー・ケアおよび WebSphere Commerce が同一のマシン上にインストールされているシステムでの、 Domino サーバー用に定義されたカスタマー・ケア・インスタンスの HTTP ポートに相当します。

- 4) 「**アプレット・コードベース URL (Applet CodeBase URL)**」フィールドに、アプレット・コードベース URL を入力します。アプレット・コードベース URL は、 WebSphere Commerce カスタマー・ケアのインストール・プログラムによって作成されるアプレット・コードのロケーションです。アプレット・コードが Lotus Sametime サーバー・マシンにインストールされていることを確認してください。

注: Web アドレスの *host_name* だけを変更してください。以下に例を示します。

```
http://host_name:port_number/wc
```

ここで *port_number* は、カスタマー・ケアおよび WebSphere Commerce が同一のマシン上にインストールされているシステムでの、 Domino サーバー用に定義されたカスタマー・ケア・インスタンスの HTTP ポートに相当します。

- 5) 必要があれば、「**モニター・タイプ**」、「**開始タイプ**」、および「**セッション制限数**」の選択内容を変更します。これらは、テストまたは実動環境に合ったものを選んで設定しなければなりません。
- 6) 「**適用**」をクリックします。 Lotus Sametime が WebSphere Commerce 用に正常に構成されたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックして、次へ進んでください。
- 7) Lotus Sametime が LDAP サーバーを WebSphere Commerce として使用する場合、「**WC メンバー・サブシステムの LDAP サーバーの使用 (Use WC Member subsystem's LDAP server)**」を選択します。
- 8) WebSphere Commerce 構成マネージャーをクローズします。

- 9) WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

OS/400 における Lotus Sametime サーバーでのカスタマー・ケアのアンインストール

OS/400 の Lotus Sametime サーバーからカスタマー・ケアをアンインストールするには、以下のステップに従います。

1. OS/400 コマンド・セッションを始動します。
2. コマンド STRQSH を発行します。
3. カスタマー・ケアのアンインストール・ディレクトリーに変更します。デフォルトの位置は次のようになっています。

```
/lotus/DOMINO/DominoServerName/domino/html/wc/_uninst
```

4. 次のコマンドを実行してアンインストール・プログラムを起動します。
uninstall.qsh
5. アンインストール・プログラムの指示に従って、アンインストールを完了します。

注: この手順では、Sametime は削除されません。Sametime の削除については、Sametime の資料を参照してください。

Lotus Sametime 自己登録フィーチャーの構成

LDAP サーバーを使用しないように Lotus Sametime を構成する場合、Lotus Sametime 自己登録フィーチャーを構成する必要があります。

自己登録を使用可能にするには、以下のようになります。

1. デフォルト・ホーム・ページとして STCENTER.NSF を設定する必要があります。STCENTER.NSF をデフォルト・ホーム・ページとして設定するには、以下のようになります。
 - a. Domino サーバーを始動します。
 - b. Lotus Administration クライアントを起動します。サーバー管理者のユーザー ID とパスワードを使ってログオンする必要があります。
 - c. 「ファイル」→「サーバーのオープン (Open Server)」を選択してから、Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーを選択します。
 - d. 「構成」タブをクリックします。
 - e. Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーのサーバー資料を編集します。
 - f. 「インターネット・プロトコル (Internet Protocols)」タブを選択します。
 - g. 「HTTP」タブを選択します。
 - h. マッピング・セクションで、「ホーム URL (Home URL)」フィールドに STCENTER.NSF を入力します。
 - i. サーバー文書を保管してクローズします。
2. Domino ディレクトリーに対するユーザー・アクセス権を設定します。Domino ディレクトリーに対するユーザー・アクセス権を設定するには、以下のようになります。

- a. Domino サーバーを始動します。
 - b. Lotus Administration クライアントを起動します。サーバー管理者のユーザー ID とパスワードを使ってログオンする必要があります。
 - c. 「ファイル」→「サーバーのオープン (Open Server)」を選択してから、Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーを選択します。
 - d. 「ファイル」タブを選択します。「自分を表示 (Show Me)」フィールドで、「データベースのみ (Database Only)」を選択します。
 - e. Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーのディレクトリー文書 (たとえば、names.nsf) を選択します。
 - f. ディレクトリー文書を右マウス・ボタン・クリックし、「アクセス・コントロール」→「管理」を選択して、「アクセス・コントロール・リスト (Access Control List)」ウィンドウを立ち上げます。
 - g. 「人、サーバー、グループ (People, Server, Group)」リストから、「Sametime Development/Lotus Notes キャンペーン製品 (Sametime Development/Lotus Notes Companion Products)」ユーザー ID を選択します。この ID が存在しない場合には、「追加」をクリックして追加します。
 - h. 「アクセス」フィールドで、「エディター」を選択します。「OK」をクリックします。
 - i. サーバー文書を保管してクローズします。
3. 自己登録フィーチャーを使用可能にします。自己登録フィーチャーを使用可能にするには、以下のようになります。
 - a. Lotus Administration クライアントを起動します。
サーバー管理者のユーザー ID とパスワードを使ってログオンする必要があります。
 - b. 「ファイル」→「サーバーのオープン (Open Server)」を選択します。
Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーを選択します。
 - c. 「ファイル」タブを選択します。
 - d. 「自分を表示 (Show Me)」フィールドで、「データベースのみ (Database Only)」を選択します。
 - e. Lotus Sametime が置かれている Domino サーバーから stconfig.nsf 文書を選択し、ダブルクリックしてオープンします。
 - f. オープンした文書で「フォーム別 (By Form)」をクリックします。
 - g. 「AnonymousAccess」フォームを選択して、ダブルクリックしてオープンします。
 - h. ダブルクリックして、フォームを編集します。
 - i. 「匿名ユーザー自身の登録可能 (Anonymous Users can register themselves)」設定を true に変更します。
 - j. 「ファイル」→「保管」を選択します。
 4. Domino サーバーを再始動します。
 5. ここで、自己登録フィーチャーをテストしてください。自己登録フィーチャーをテストするには、以下のようになります。
 - a. Web ブラウザーに以下の URL を入力します。

http://Lotus_Sametime_server/stcenter.nsf

- b. 「登録」リンクをクリックします。
- c. 「**Lotus Sametime を使用するための登録 (Register to use Lotus Sametime)**」リンクを選択します。
- d. 「**Lotus Sametime を使用するための登録 (Register to use Lotus Sametime)**」ページにユーザー情報を入力し、「**要求の実行依頼 (Submit Request)**」をクリックします。確認ページが表示されます。これで、ユーザーが登録されます。

次のステップ

WebSphere Commerce にカスタマー・ケアをインストールして構成し終わったら、コラボレーション・フィーチャーを使用するためにストアを構成する必要があります。コラボレーション・フィーチャーを使用するためにストアを構成する方法の詳細は、51 ページの『第 6 章 ストアでのコラボレーション・コンポーネントの使用可能化』を参照してください。

第 5 章 WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース

Business WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペースは、WebSphere Commerce Business Edition にのみ備えられています。

コラボレイティブ・ワークスペースは、Lotus QuickPlace を使用するコラボレイティブ・インターフェースとして機能します。このインターフェースによって、バイヤーとセラー（またはセラーの場合のアカウント担当者）の間の契約条件の交渉においてや、セラー組織内のビジネス・ユーザーどうしにおいて、ビジネス・ディスカッションがサポートされます。コラボレイティブ・ワークスペースでは、非同期式通信がサポートされています。バイヤーを除くどの役割でも、WebSphere Commerce アクセラレーターおよび WebSphere Commerce のデフォルトの Lotus QuickPlace テンプレートを使用してコラボレイティブ・ワークスペースを作成することができます。ワークスペースにバイヤーを追加できるのは、Lotus QuickPlace Manager アクセス権をもつアカウント担当者またはアカウント・マネージャーだけです。コラボレイティブ・ワークスペースを使用するには、リレーショナル・データベース上ではなく、WebSphere Commerce が置かれた LDAP サーバー上にメンバー・データがなければなりません。LDAP サーバーの構成についてのインストール指示は、77 ページの『第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce』をご覧ください。コラボレイティブ・ワークスペースおよびワークスペース・メンバー情報の詳細は、WebSphere Commerce システムを通して管理されます。コラボレーションに使用されるディスカッション・スレッド、送付、またはファイル添付は、Lotus QuickPlace サーバー上に保存されます。

Lotus QuickPlace は、チーム・コラボレーションのためのセルフサービス Web ツールです。Lotus QuickPlace を使うと、Web 上の安全な集中ワークスペースの作成を手軽に作成できます。即時に参加できる構造であるため、チームは Lotus QuickPlace を使用して以下のことを実行できます。

- 人、タスク、計画、およびリソースを調整する。
- 共同作業、アイデアやディスカッションの共用、問題の解決、文書の共同作成、ファイル交換、適切な注意事項の管理などを行う。
- アクションや決定あるいは発見や教訓について連絡を取り合ったり、得られた知識をより広い読者層を対象に公開したりする。

チームは、プロジェクト管理、随時イニシアチブへの迅速な応答、チームの Web サイトのため、そして幅広いエンタープライズや価値の連鎖に及ぶ個別のビジネス・プロセスを容易に実施したりするために、Lotus QuickPlace を使用します。

Linux IBM Lotus QuickPlace は、Linux ではサポートされません。しかし、Windows で稼働する IBM Lotus QuickPlace は、Linux で稼働する WebSphere Commerce とともに使用することができます。

コラボレイティブ・ワークスペースのインストールおよび構成

コラボレイティブ・ワークスペースをインストールして構成するには、以下のようになります。

1. 77 ページの『第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce』の解説どおりに LDAP のインストールと構成が完了していることを確認してください。
2. Lotus QuickPlace をインストールします。『Lotus QuickPlace のインストール』を参照してください。
3. WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントをインストールします。43 ページの『WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール』を参照してください。
4. Lotus QuickPlace で使用するように WebSphere Commerce を構成します。48 ページの『Lotus QuickPlace と併用するための WebSphere Commerce の構成』を参照してください。

注: Lotus QuickPlace、Lotus Sametime、WebSphere Commerce、および LDAP は別々のマシンにインストールしてください。

Lotus QuickPlace のインストール

Lotus QuickPlace はスタンドアロン・サーバーにインストールしてください。Lotus QuickPlace、Lotus Sametime、WebSphere Commerce、および LDAP は別々のマシンにインストールしてください。

Lotus QuickPlace 3.0 では、Lotus QuickPlace のインストールの前に、マシン上に Lotus Domino 5.0.10 がインストールされていなければなりません。

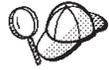
以下の資料に述べられている解説に従って Lotus QuickPlace をインストールして構成してください。

-  「*Lotus QuickPlace 3.0 Installation and Upgrade Guide for IBM AIX and Sun Solaris*」
-  「*Lotus QuickPlace 3.0 for iSeries Installation and Managing Guide*」
-  「*Lotus QuickPlace 3.0 Installation and Upgrade Guide for IBM AIX and Sun Solaris*」
-  「*Lotus QuickPlace 3.0 Installation and Upgrade Guide*」

Lotus QuickPlace の資料は、以下の Web サイトにある Lotus Developer Domain のドキュメント・ライブラリーから入手することができます。

<http://www.lotus.com/ldd/doc>

WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・フィーチャーを使用するには、WebSphere Commerce および Lotus QuickPlace で同一の LDAP サーバーを使用するように構成する必要があります。



Lotus Domino の管理者 ID とパスワードを、Lotus QuickPlace の管理者 ID とパスワードとして使用することをお勧めします。

WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール

WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce と同じ LDAP サーバーを使用するように Lotus QuickPlace を構成します。『WebSphere Commerce と同じ LDAP サーバーを使用するための Lotus QuickPlace の構成』を参照してください。
2. WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントを Lotus QuickPlace サーバーにインストールします。44 ページの『WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール』を参照してください。
3. Lotus Domino 上で Java™ サブレットを使用可能にします。

WebSphere Commerce と同じ LDAP サーバーを使用するための Lotus QuickPlace の構成

WebSphere Commerce と同じ LDAP サーバーを使用するように Lotus QuickPlace を構成するには、次のようにします。

1. Web ブラウザーをオープンして、以下の Web サイトを入力します。

```
http://QuickPlace_hostname/QuickPlace
```

ただし *QuickPlace_hostname* は、Lotus QuickPlace のインストール先のマシンの TCP/IP ホスト名です。

Lotus QuickPlace の「ウェルカム」ページが表示されます。

2. Lotus QuickPlace の「ウェルカム」ページで「サイン・イン」をクリックして、表示されたダイアログに Lotus QuickPlace 管理者 ID とパスワードを入力します。
3. 「サーバーの設定」をクリックします。「サーバー管理の指示 (Server Administration Instructions)」ページが表示されます。
4. 「セキュリティ」をクリックします。「セキュリティ」ページが表示されます。
5. 「このサーバーに新しい QuickPlace を作成できるユーザー (Who can create new places on this server?)」の下の「名前とパスワードがわかっている特定のユーザー (またはグループ) のみ (Only specific users (or groups) who provide a name and password)」を選択します。
6. 「ユーザー・ディレクトリー (User Directory)」をクリックします。「ユーザー・ディレクトリー (User Directory)」ページが表示されます。
7. 「ディレクトリーの変更 (Change Directory)」をクリックします。「ユーザー・ディレクトリーの変更 (Change User Directory)」ページが表示されます。
8. 「タイプ」プルダウンで「LDAP サーバー」を選択します。

9. 「名前」フィールドに LDAP サーバーの TCP/IP ホスト名を入力します。
10. 「拡張設定 (Advanced Settings)」の下の「検索ベース (Search base)」に、77 ページの『第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce』で追加した接尾部 DN を入力します。
11. 「拡張設定 (Advanced Settings)」の下の「ディレクトリーの検索時に下記の認証情報を使用する場合にチェック (Check to use credentials specified below when searching the directory)」を選択します。
12. 「拡張設定 (Advanced Settings)」の下の「ユーザー名」フィールドに、LDAP の管理者名を入力します。たとえば、iSeries で cn=root、または cn=Administrator とします。
13. 「拡張設定 (Advanced Settings)」の下の「パスワード」フィールドに、LDAP の管理者名のパスワードを入力します。
14. 「新規」の下の「管理者が QuickPlace ごとに新しいユーザーを作成できるようにする (Allow managers to create new users in each place)」を選択します。
15. 「次へ」をクリックします。
16. Web ブラウザーをクローズします。

WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール

WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントに関する説明は、オペレーティング・システムによって異なります。ご使用のオペレーティング・システム用の説明を選択してください。

- 『AIX、Solaris、および Windows における WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール』
- 46 ページの『OS/400 における WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール』

AIX、Solaris、および Windows における WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール

AIX、Solaris、および Windows において Lotus QuickPlace サーバーに WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. Lotus Domino を停止することで Lotus QuickPlace を停止します。 Lotus Domino の停止に関する詳細は、Lotus Domino の資料を参照してください。
2. WebSphere Commerce CD 2 を挿入します。
3.  必要であれば、CD-ROM ドライブをマウントします。
4. 以下のコマンドを実行して、コラボレイティブ・ワークスペースをインストールします。

 コマンドを実行する前に、以下を確認してください。

- root でログインしている。
- 作業している端末が、グラフィックスをサポートしている。

▶ **AIX** `mount_point/CollaborativeWS/setup_aix`

▶ **Solaris** `mount_point/CollaborativeWS/setup_solaris`

▶ **Windows** `CD-ROM_drive:¥CollaborativeWS¥setup.exe`

ここで、`mount_point` はマウントされる CD-ROM ドライブへのパス (`/mnt/cd0` など)、`CD-ROM_drive` は CD-ROM ドライブ名 (E など) です。

▶ **AIX** ▶ **Solaris** コマンドを `root` で実行してください。

5. 「セットアップ言語の選択 (Choose Setup Language)」ウィンドウが表示されます。任意の言語を選択します。
6. 「ウェルカム」ウィンドウがオープンします。「次へ」をクリックして先に進みます。
7. 「使用許諾契約書」画面がオープンします。ご使用条件をよく読み、同意するかどうかを決定してください。ご使用条件に同意すると、インストール・プログラムが継続されます。同意しない場合、インストール・プログラムは終了します。
8. 「宛先場所の選択」ウィンドウがオープンします。このウィンドウで、WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントをインストールするデフォルトのインストール・パスをオーバーライドできます。インストール・パスを選択したら、「次へ」をクリックして次に進んでください。確認ダイアログで「次へ」を再びクリックします。インストール進行状況表示バーが表示されます。
9. 「セットアップが完了しました」ウィンドウが表示されます。「終了」をクリックします。
10. Lotus Domino を始動することで Lotus QuickPlace を始動します。Lotus Domino の始動に関する詳細は、Lotus Domino の資料を参照してください。

注: LDAP サーバーを再始動するたびに、Lotus QuickPlace サーバーを再始動する必要があります。

AIX、Solaris、および Windows における WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのアンインストール:

▶ **Windows** Windows の Lotus Sametime サーバーからコラボレイティブ・ワークスペースをアンインストールするには、Windows のコントロールパネルの「プログラムの追加と削除」ユーティリティーを使用して、アンインストール・プログラムの指示に従ってアンインストールを実行します。

▶ **AIX** ▶ **Solaris** AIX または Solaris プラットフォームの Lotus Sametime サーバーからコラボレイティブ・ワークスペースをアンインストールするには、以下のステップに従います。

1. グラフィックスをサポートする端末から `root` ユーザーとしてログオンします。
2. インストールのステップ 7 で指定したディレクトリーに変更します。デフォルトでは、`/CollabWS` です。

3. 以下のコマンドを実行して、アンインストール・ディレクトリーに変更します。

```
cd _uninst
```

4. 以下のコマンドを実行してアンインストール・プログラムを起動します。

```
AIX ./uninstall_aix
```

```
Solaris ./uninstall_solaris
```

5. アンインストール・プログラムの指示に従って、アンインストールを完了します。

OS/400 における WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのインストール

OS/400 においてローカル Lotus QuickPlace に WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. 次のコマンドを使用して PASE シェルを入力します。
CALL QP2TERM
2. WC55/CollaborativeWS ディレクトリーに変更します。
3. **setup.qsh** コマンドを送出します。
4. リストから言語を選択して、Enter を押します。
5. 0 を入力してから、Enter を押して続行します。
6. 1 を入力してから、「ウェルカム」ページで Enter を押します。
7. Enter を押して使用許諾契約書を確認します。
8. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
9. コラボレイティブ・ワークスペースをインストールする QuickPlace サーバーを選択して、Enter を押します。
10. 0 を入力してから、Enter を押して続行します。
11. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
12. 「宛先 (Destination)」ページで、適切なインストール場所を選択して、Enter を押して続行します。デフォルトの場所をお勧めします。
13. 1 を入力してから、Enter を押して続行します。
14. 「インストールの要約 (Install Summary)」ページで、3 を入力してから Enter を押すと完了です。

WebSphere Commerce コラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントを、Windows マシンからリモートの OS/400 Lotus QuickPlace サーバーにインストールするには、次のようにします。

1. Windows マシンで、DOS プロンプト・ウィンドウをオープンします。
2. **setup.exe -os400** コマンドを送出します。
3. ターゲット・マシンおよびユーザー ID、パスワードを、iSeries ログオン・ウィンドウで指定します。「次へ」をクリックして先へ進みます。
4. 「セットアップ言語の選択 (Choose Setup Language)」ウィンドウがオープンします。リストから言語を選択し、「OK」をクリックします。
5. 「ウェルカム」ウィンドウがオープンします。「次へ」をクリックして先へ進みます。

6. 「使用許諾契約書」画面が表示されます。「使用許諾契約書」が表示される前に、DOS ウィンドウが少しの時間表示されることがありますのでご注意ください。ご使用条件をよく読み、同意するかどうかを決定してください。ご使用条件に同意すると、インストール・プログラムが継続されます。同意しない場合、インストール・プログラムは終了します。
7. カスタマー・ケアをインストールする Domino サーバーを選択して、「次へ」をクリックして先に進みます。

OS/400 における WebSphere Commerce のコラボレイティブ・ワークスペース・コンポーネントのアンインストール: OS/400 の Lotus Sametime サーバーからコラボレイティブ・ワークスペースをアンインストールするには、以下のステップに従います。

1. OS/400 コマンド・セッションを始動します。
2. コマンド STRQSH を発行します。
3. カスタマー・ケアのアンインストール・ディレクトリーに変更します。デフォルトの位置は次のようになっています。
`/lotus/DOMINO/DominoServerName/domino/CollabWS/_uninst`
4. 次のコマンドを実行してアンインストール・プログラムを起動します。
`uninstall.qsh`
5. アンインストール・プログラムの指示に従って、アンインストールを完了します。

Lotus Domino での Java サブレット・サポートの使用可能化

Lotus Domino 上で Java サブレット・サポートを使用可能にするには、次のようにします。

1. Lotus Domino が実行中であることを確認します。 Lotus Domino の始動に関する詳細は、 Lotus Domino の資料を参照してください。
2. Web ブラウザーをオープンして、以下の Web サイトを入力します。
`http://QuickPlace_hostname/names.nsf`
ただし `QuickPlace_hostname` は、マシンの TCP/IP ホスト名です。
3. 表示されたダイアログに Lotus Domino 管理者 ID とパスワードを入力します。
4. 「サーバー - サーバー (Servers-Servers)」をクリックします。「サーバー - サーバー (Servers-Servers)」ページが表示されます。
5. Java サブレット・サポートを使用可能にしたいサーバーをダブルクリックします。「サーバー情報 (Server information)」ページが表示されます。
6. 「サーバーの編集 (Edit Server)」をクリックします。
7. 「インターネット・プロトコル (Internet Protocols)」タブで、「Domino Web エンジン (Domino Web Engine)」をクリックし、「Java サブレット・サポート (Java servlet support)」リスト (「Java サブレット (Java Servlets)」の下) から Domino Servlet Manager を選択します。
8. 「セキュリティ」をクリックします。
9. 「ブラウザーからのサーバーの管理 (Administer the server from a browser)」フィールド (「サーバー・アクセス (Server Access)」の下) から

「Java/Javascript/COM の無制限実行 (Run unrestricted Java/Javascript/COM)」フィールド (「Java/COM の制約事項 (Java/COM Restrictions)」の下) に値をコピーします。

10. 「保管してクローズ (Save and Close)」をクリックします。
11. Lotus Domino を再始動します。 Lotus Domino の再始動に関する詳細は、 Lotus Domino の資料を参照してください。

Lotus QuickPlace と併用するための WebSphere Commerce の構成

Lotus QuickPlace とともに稼働するように WebSphere Commerce を構成するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce を停止します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
3. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」 → 「コラボレーション」 → 「QuickPlace」をオープンします。
4. 「ホスト名」フィールドに、 Lotus QuickPlace/Lotus Domino サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
5. 「HTTP ポート番号 (HTTP port number)」フィールドに HTTP ポート番号を入力します。デフォルトの HTTP ポートは 80 です。
6. 「HTTPS ポート番号 (HTTPS port number)」フィールドに HTTPS ポート番号を入力します。デフォルトの HTTPS ポートは 443 です。
7. QuickPlace サーバーで SSL を使用する場合、「SSL の使用」を選択します。
8. 「管理者ログオン」フィールドに Lotus Domino の管理者ログインを入力します。
9. 「管理者のパスワード」フィールドに Lotus Domino 管理者パスワードを入力します。
10. 「コラボレーション管理者」フィールドに、 QuickPlace 管理者のユーザー名を入力します。
11. 「コラボレーション管理者パスワード」フィールドに、 QuickPlace 管理者のパスワードを入力します。
12. インストールされている Lotus QuickPlace サーバーのロケールとして正しいものを選択します。例: en_US
13. サブレット・サポートが使用可能になっていれば、サブレットのパスを「サブレット URL パス」に入力します。デフォルトのサブレット・パスは /servlet です。
14. 「適用」をクリックします。「WebSphere Commerce の Lotus QuickPlace は正常に構成されました」のメッセージが表示されます。「OK」をクリックします。

更新が正常に完了すると、パスワードは自動的に暗号化されます。

15. WebSphere Commerce 構成マネージャーをクローズします。

16. WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

オプションの構成

WebSphere Commerce でコラボレイティブ・ワークスペースをインストールして構成し終わったら、以下のオプションの構成を追加することができます。

- Lotus QuickPlace 用のテンプレートを作成する。
- E メール通知をセットアップする。
- Lotus QuickPlace で UTF-8 を使用できるようにする。

Lotus QuickPlace 用テンプレートの作成

Lotus QuickPlace のカスタム・テンプレートの作成については、「*Lotus Customizing QuickPlace*」のマニュアルをご覧ください。この資料は、以下の Web アドレスの IBM の Redbook Web サイトから入手できます。

<http://www.redbooks.ibm.com/>

注: Lotus QuickPlace 用のテンプレートを作成する際、テンプレート名内でスペースを使用することはできません。

E メール通知のセットアップ

コラボレーションのフィーチャーの 1 つには、E メール通知があります。E メール通知をセットアップするには、以下のようにします。

注: E メール通知を構成する場合、送信側と受信側の両方に E メール・アドレスがなければなりません。つまり、wcsadmin としてログインした場合に、E メール通知を設定したユーザーを追加したいなら、まず WebSphere Commerce 管理コンソールを使用することによって、wcsadmin の E メール・アドレスを追加する必要があります。送信側か受信側のいずれかに E メールがないなら、E メール通知は送信されません。

1. WebSphere Commerce 管理コンソールに、サイト管理者としてログインします。
2. 「**サイト**」をクリックしてから「**OK**」をクリックします。
3. 「**構成**」メニューで、「**トランスポート**」を選択します。
4. 「**E メール**」の横のチェック・ボックスを選択してから、「**構成**」をクリックします。
5. 「**ホスト**」フィールドに、E メール・サーバーの名前を入力します。
6. 「**プロトコル**」を必ず SMTP に設定します。この時点で、「**再試行期間 (Retry Duration)**」パラメーターにも入力することができます。「**OK**」をクリックします。
7. 「**構成**」メニューから、「**メッセージ・タイプ**」を選択します。
8. 「**新規**」をクリックします。
9. 「**メッセージ・タイプ**」ドロップダウン・リストから、「**コラボレイティブ・ワークスペース用の通知メッセージ (Notification Message for Collaborative Workspace)**」を選択します。

10. 「メッセージ重大度」を「0 ~ 0 (0 to 0)」に設定します。
11. 「トランスポート」を「E メール」に設定します。
12. 「デバイス形式」を「標準デバイス形式」に設定します。
13. 「次へ」をクリックしてから「終了」をクリックします。

注: E メール通知を構成する場合、送信側と受信側の両方に E メール・アドレスがなければなりません。つまり、wcsadmin としてログインした場合に、E メール通知を設定したユーザーを追加したいなら、まず WebSphere Commerce 組織管理コンソールを使用することによって、wcsadmin の E メール・アドレスを追加する必要があります。送信側か受信側のいずれかに E メールがないなら、E メール通知は送信されません。

UTF-8 の使用のための Lotus QuickPlace の構成

UTF-8 形式を使用するよう Lotus QuickPlace を構成するには、以下のように入力してください。

1. Web ブラウザーをオープンして、以下の Web サイトを入力します。
`http://Lotus QuickPlace_server_hostname/names.nsf`
2. 「サーバー - サーバー (Servers-Servers)」をクリックします。
3. サーバー文書をダブルクリックします。
4. 「サーバーの編集 (Edit Server)」をクリックします。
5. 「インターネット・プロトコル (Internet Protocols)」をクリックします。
6. 「Domino Web エンジン (Domino Web Engine)」をクリックします。
7. 「出力での UTF-8 の使用 (Use UTF-8 for output)」フィールドで、「はい」を選択します。
8. 「保管してクローズ (Save and Close)」をクリックします。Lotus QuickPlace サーバーを再始動します。

次のステップ

WebSphere Commerce でのコラボレイティブ・ワークスペースのインストールおよび構成と、オプションの構成の追加が終わったら、コラボレーション・フィーチャーを使用するためにストアを構成する必要があります。コラボレーション・フィーチャーを使用するためにストアを構成する方法の詳細は、51 ページの『第 6 章 ストアでのコラボレーション・コンポーネントの使用可能化』を参照してください。

第 6 章 ストアでのコラボレーション・コンポーネントの使用可能化

どのコラボレーション・コンポーネントのインストールと構成が完了した場合でも、ご自分のストア用にそれを使用可能にする必要があります。WebSphere Commerce に組み込まれているサンプル・ストアをご使用の場合には、以下の詳細情報をご覧ください。

- *WebSphere Commerce* ストア開発ガイド。
- WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ「Creating a store using a sample」のトピック

サンプルを基にしないでストアを開発する場合は、コラボレーションを使用可能にするための特定のステップを行う必要があります。ご自分のストアでコラボレーションを使用可能にする方法については、以下の資料をご覧ください。

- *WebSphere Commerce* ストア開発ガイド。

Lotus Sametime および Lotus QuickPlace に関する個々の詳細は、Lotus より発行されている資料を参照してください。

「*WebSphere Commerce* ストア開発ガイド」は、以下の WebSphere Commerce Technical library から使用できます。

<http://www.ibm.com/software/commerce/library/>

第 5 部 WebSphere Commerce ビジネス・インテグレーション・アダプター

以下のソフトウェアを使って、WebSphere Commerce を他のビジネス・プロセスに統合することができます。

- 55 ページの『第 7 章 WebSphere MQ』
- 69 ページの『第 8 章 IBM CrossWorlds InterChange Server』

こうしたソフトウェア・パッケージは WebSphere Commerce には付属していないので、別途購入する必要があります。第 5 部の各章では、これらの製品とともに稼働するように、WebSphere Commerce で提供されているアダプターを構成する方法について述べています。

重要

その他のビジネス・プロセスと WebSphere Commerce を統合するのに、WebSphere Application Server の組み込みメッセージング・コンポーネントを使用することはできません。組み込みメッセージング・コンポーネントは、WebSphere Commerce が提供するいずれのアダプターによってもサポートされていません。

第 7 章 WebSphere MQ

WebSphere MQ を使ってバックエンド・システムと外部システムを WebSphere Commerce に統合するために、WebSphere Commerce には、インバウンド要求用の WebSphere MQ (以前は MQSeries® と呼ばれていた) のリスナー、アウトバウンド要求用の WebSphere MQ のアダプターが用意されています。

Linux Linux 上の WebSphere MQ は WebSphere Commerce ではサポートされていません。しかし、Windows で稼働する WebSphere MQ は、Linux で稼働する WebSphere Commerce とともに使用できます。

このリスナーは、WebSphere MQ バージョン 5.3 以上をサポートします。WebSphere MQ バージョン 5.3 には、Java Message Service (JMS) 用の MQSeries クラスと Java 用の MQSeries クラスが組み込まれています。

対応する物理的な WebSphere MQ オブジェクトにマップされる JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューを作成する必要があります。それを作成すれば、WebSphere Commerce リスナーは JMS を介して WebSphere MQ エンティティーにアクセスできるようになります。

WebSphere Commerce と WebSphere MQ 間の接続を 2 つの接続モードのいずれかでセットアップできます。

バインディング・モード

WebSphere Commerce は、WebSphere MQ と同じマシンにインストールしますが、Java Messaging Server (JMS) API を使用する Java 用の MQSeries クラスを介して WebSphere MQ に接続します。通信は TCP/IP 接続ではなくプロセス間バインディング接続を介して行われるので、バインディング・モードはクライアント・モードよりもパフォーマンスが良い可能性があります。

クライアント・モード

WebSphere Commerce および WebSphere MQ は、TCP/IP を使用して接続します。WebSphere Commerce が 1 台のマシンにインストールされ、WebSphere MQ が別のマシンにインストールされている場合には、このモードを使用する必要があります。このモードでは、WebSphere MQ クライアントは WebSphere Commerce マシン上にインストールすることが求められています。

重要

WebSphere Application Server 組み込みメッセージング・コンポーネントは、WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce アダプターによってはサポートされていません。

WebSphere Commerce で WebSphere MQ を使用するには、次のようにします。

1. 必要であれば、WebSphere MQ の資料に述べられている解説に従って WebSphere MQ をインストールします。どの WebSphere MQ 資料を参考にするかに関する詳細は、『WebSphere MQ のインストール』に記載されています。WebSphere MQ のインストール時には、必ず Java メッセージング・コンポーネントもインストールしてください。
2. 既存の WebSphere MQ オブジェクトを示すか、または WebSphere Commerce と WebSphere MQ を併用するのに必要となる新しい WebSphere MQ オブジェクトを作成します。WebSphere MQ オブジェクトの作成方法は、58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』に記載されています。
3. JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューを作成します。JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューの作成方法は、60 ページの『WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成』に記載されています。
4. WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーを使用可能にします。WebSphere MQ 用のリスナーを使用可能化する方法は、66 ページの『WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成』に記載されています。

WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーと WebSphere Commerce メッセージング・システムの詳細は、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプを参照してください。

WebSphere MQ のインストール

下記の資料に記載されている方法に従って WebSphere MQ をインストールします。その際、必ず WebSphere MQ の Java メッセージング・コンポーネントもインストールしてください。

-  「*WebSphere MQ for AIX* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」
-  「*WebSphere MQ for iSeries* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」
-  「*WebSphere MQ for Solaris* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」
-  「*WebSphere MQ for Windows* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」

これらの資料は以下の Web サイトに掲載されています。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/platspecific.html>

URL は、紙面の都合上 2 行に分けて書いてありますが、1 行で入力してください。

重要

WebSphere MQ では、マシン名中にスペースを使用することはできません。スペースが使われているマシン名の付いたマシンに WebSphere MQ をインストールすると、キュー・マネージャーは作成できません。

MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の確認

WebSphere MQ クライアントまたはサーバーを WebSphere Commerce と同じノード上にインストールする場合には、MQ_INSTALL_ROOT 環境変数が適切な場所を指していることを確認してください。

MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の値をチェックするには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「環境 (Environment)」を展開し、「WebSphere 変数の管理 (Manage WebSphere Variables)」を選択します。「WebSphere 変数 (WebSphere variables)」ページが表示されます。
5. MQ_INSTALL_ROOT の値が正しいことを確認します。

MQ_INSTALL_ROOT 変数は、WebSphere Commerce マシン上の WebSphere MQ インストール・ディレクトリーを指しているはずですが、

値が正しくない場合には、次のようにして変更します。

- a. 「MQ_INSTALL_ROOT」をクリックします。
 - b. 「値」フィールドに、正しいパスを入力します。
 - c. 「OK」をクリックします。
 - d. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
 - e. 「保管」ページで、「ノードとの変更の同期化 (Synchronize changes with node)」を選択します。
 - f. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
6. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
 7. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成

WebSphere Commerce では、WebSphere Commerce を WebSphere MQ とともに稼働させるために、WebSphere MQ で情報のセットを定義する必要があります。これらには、キュー・マネージャーやキューのセットが含まれます。

WebSphere Commerce とともに稼働するように WebSphere MQ を構成するには、次のようにします。

1. mqm ユーザー・グループにルート以外の WebSphere Commerce ユーザー ID を追加します。

root ではない WebSphere Commerce ユーザー ID は、WebSphere Commerce のインストール前に作成されています。

2.  WebSphere Commerce を始動するのに使用する Windows ユーザー ID を mqm グループに追加します。
3. WebSphere Commerce が使用するキュー・マネージャーを識別します。これは、既存のキュー・マネージャーか、新たに作成したキュー・マネージャーにできません。キュー・マネージャーの選択は、統合構成によって決まります。

キュー・マネージャーの作成の詳細は、WebSphere MQ の資料を参照してください。WebSphere MQ の資料に関する情報については、67 ページの『追加の WebSphere MQ 資料』で提供されています。

この章の解説では、キュー・マネージャー名は *hostname.qm* であると想定されています。ただし *hostname* は、WebSphere MQ を実行するマシンのホスト名 (ドメインは含まない) です。

キュー・マネージャー・リスナーで使用されるキュー・マネージャー名とポート番号をメモしておいてください。この情報は、後のステップで使います。

重要

WebSphere Commerce を始動するために使用されるオペレーティング・システム・ユーザー ID がキュー・マネージャーに関しても許可が与えられていることを確認します。WebSphere MQ キュー・マネージャーに関する許可をユーザー ID に与える方法については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

キュー・マネージャー名には、大文字小文字の区別があります。キュー・マネージャー名の大文字小文字が後のステップで正しく使用されるようにします。

4. キュー・マネージャーのローカル・メッセージ・キューを識別します。これらは既存のメッセージ・キューか、新たに作成したキューにできます。

キューの作成の詳細は、WebSphere MQ の資料を参照してください。WebSphere MQ の資料に関する情報については、67 ページの『追加の WebSphere MQ 資料』で提供されています。

この章の解説では、以下のローカル・メッセージ・キューを作成することを想定しています。

キュー	説明
<i>hostname.error</i>	デフォルト・エラー・キュー。エラーのインバウンド・メッセージを収集します。
<i>hostname.inbound</i>	WebSphere MQ 用のアダプターの SendReceiveImmediate モードによって使用されます。ここに、バックエンド・システムからの返答および応答メッセージが送られます。WebSphere Commerce はバックエンド・システムへの発信要求に基づいて、返答および応答メッセージを選び出すこともできます。
<i>hostname.inboundp</i>	このキューに到着するメッセージは、並列に処理されます。
<i>hostname.inbounds</i>	このキューに到着するメッセージは、先入れ先出し法に基づいて順次処理されます。
<i>hostname.outbound</i>	WebSphere Commerce が開始したアウトバウンド・メッセージおよび WebSphere Commerce からの応答メッセージに使用されます。

ただし *hostname* は、WebSphere MQ を実行するマシンの TCP/IP 名です。

識別または作成したメッセージ・キューの名前をメモしておいてください。この情報は、後のステップで使います。

重要

WebSphere Commerce を始動するために使用されるオペレーティング・システム・ユーザー ID が、メッセージ・キューに関する許可が与えられていることを確認します。WebSphere MQ メッセージ・キューに関する許可をユーザー ID に与える方法については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

キュー名には、大文字小文字の区別があります。キュー名の大文字小文字が後のステップで正しく使用されるようにします。

注: 定義するキューの数は、WebSphere Commerce が統合されるアプリケーションによって異なります。これら 5 つのキューは、統合に必要な最小限のキューです。

5. (クライアント・モードのみ) 作成したキュー・マネージャー用のリスナー・ポートを作成します。

WebSphere MQ を構成するステップを完了したら、60 ページの『WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成』の解説に進んでください。

WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成

WebSphere MQ とともに稼働するように WebSphere Application Server を構成するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数を判別します。詳しい説明は、『JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数の判別』に述べられています。
5. WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーを作成します。詳しい説明は、61 ページの『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成』に述べられています。
6. WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成します。詳しい説明は、64 ページの『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成』に述べられています。
7. WebSphere Application Server の管理コンソールを終了します。
8. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Application Server を構成するステップを完了したら、66 ページの『WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成』の解説に進んでください。

JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数の判別

JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数を判別するには、WebSphere Commerce マシン上で次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソール ナビゲーション・ツリーで、「**アプリケーション (Applications)**」を展開して、「**企業アプリケーション (Enterprise Applications)**」を選択します。「企業アプリケーション (Enterprise Applications)」ページが表示されます。
2. 企業アプリケーションのリストで、**WC_instance_name** をクリックします。ここで、*instance_name* はご使用の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
3. 「関連アイテム (Related Items)」表で、「**コネクター・モジュール (Connector Modules)**」をクリックします。「関連アイテム (Related Items)」表を参照するには、ページを下にスクロールする必要があるかもしれません。「コネクター・モジュール (Connector Modules)」ページが表示されます。

4. コネクタ・モジュールのリストで、「**使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)**」をクリックします。「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページが表示されます。
5. 「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**リソース・アダプター (Resource Adapter)**」をクリックします。「WebSphere MQ」ページに `WC_instance_name.Adapter` が表示されます。ここで、`instance_name` はご使用の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
6. 「WebSphere MQ」ページの `WC_instance_name.Adapter` の「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**J2C 接続ファクトリー (J2C Connection Factories)**」をクリックします。「J2C 接続ファクトリー (J2C Connection Factories)」ページが表示されます。
7. J2C 接続ファクトリーのリストで、「**使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)**」をクリックします。「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページが表示されます。
8. 「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**接続プール (Connection Pool)**」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。「接続プール (Connection Pool)」ページが表示されます。
9. 「**最大接続数**」フィールドの値をメモに取ってください。この値は、『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成』で必要になります。

重要: JCA-JMS コネクタの `ManagedConnections` の最大数の値を後で変更する場合には、WebSphere MQ JMS プロバイダーの `ManagedConnections` の最大数の値も変更する必要があります。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーを作成するには、WebSphere Commerce マシンで次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソール ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)**」を選択します。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
2. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

- c. 「**OK**」をクリックします。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
3. 「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)**」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。

「WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)」ページが表示されます。

- 4. 「WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)」ページの「**新規**」をクリックします。
- 5. 各フィールドに次のように入力します。

「名前」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの名前を入力します。この章の解説では、WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの名前は `JMSQueueConnectionFactory` であるとしています。

「JNDI 名 (JNDI Name)」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を入力します。この章の解説では、WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの JNDI 名は `JMSQueueConnectionFactory` となっています。

「キュー・マネージャー (Queue Manager)」

58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で識別または作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。`hostname.qm` などの、作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。ただし `hostname` は、WebSphere MQ を実行するマシンのホスト名 (ドメインは含まない) です。

「ホスト」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。

クライアント・モード

クライアント・モード WebSphere MQ を実行するマシンの完全修飾 TCP/IP ホスト名を入力します。

「ポート」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード 58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で作成したキュー・マネージャーのリスナー・ポート番号を入力します。

「トランスポート・タイプ (Transport Type)」

システム構成に基づいたトランスポート・タイプを以下から選択します。

- WebSphere Commerce と WebSphere MQ が同一マシンにインストールされ、バインディング・モードを使用したい場合、**BINDINGS** を選択します。
- WebSphere Commerce マシンに WebSphere MQ がインストールされていて、クライアント・モードを使用したい場合には、**CLIENT** を選択します。

「チャンネル (Channel)」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード このフィールドは無視します。

「CCSID」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード これは、WebSphere MQ キュー・マネージャーで使用する Coded Character Set Identifier (CCSID) です。このフィールドには 1208 を入力します。CCSID 1208 は、WebSphere MQ で使用される文字セットである UTF-8 です。

「メッセージ保存 (Message Retention)」

「メッセージ保存の使用可能化 (Enable message retention)」チェック・ボックスのチェックをはずします。

「XA は使用可能化済み (XA Enabled)」

「XA の使用可能化 (Enable XA)」チェック・ボックスのチェックをはずします。

他のフィールドはすべて無視してかまいません。

完了したら、「適用」をクリックします。

6. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「接続プール (Connection Pool)」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。「接続プール (Connection Pool)」ページが表示されます。
7. 「最大接続数」に、60 ページの『JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別』で判別した値よりも大きい値を設定します。たとえば、60 ページの『JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別』で値 30 が検出されたのであれば、ここでは値 31 を入力します。

重要: この値は、JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の値よりも必ず大きくなくてはなりません。 JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の値を後で変更する場合には、 WebSphere MQ JMS プロバイダーの ManagedConnections の最大数の値も変更する必要があります。

8. 「OK」をクリックします。
9. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
10. 「保管」ページの「保管」をクリックします。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成

WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーには、種々の JMS キューが必要です。それらの JMS キューは、58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で識別または作成した WebSphere MQ メッセージ・キューにマップされます。 JMS キューは、WebSphere MQ メッセージ・キューに次のようにマップされます。

表 1. WebSphere MQ キューに対する JMS キューのマッピング

JMS キュー	WebSphere MQ キュー
JMSErrorQueue	hostname.error
JMSInboundQueue	hostname.inbound
JMSOutboundQueue	hostname.outbound
JMSParallelInboundQueue	hostname.inboundp
JMSSerialInboundQueue	hostname.inbounds

ただし *hostname* は、WebSphere MQ を実行するマシンの TCP/IP 名です。

WebSphere Application Server で WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成すると、JMS キューが作成されます。

表中の JMS キュー名は、WebSphere Commerce で使用されるデフォルト名です。 WebSphere Commerce 構成マネージャーを使用して JMS キュー名を変更した場合には、 JMS キュー名は新規キュー名と一致するように変更する必要があります。

注: 定義するキューの数は、WebSphere Commerce が統合されるアプリケーションによって異なります。これら 5 つのキューは、統合に必要な最小限のキューです。

重要: キュー名には、大文字小文字の区別があります。 キュー名の大文字小文字が正しく使用されるようにします。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソール ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)**」を選択します。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
2. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。

- a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「**OK**」をクリックします。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
3. 「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)**」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。

「WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)」ページが表示されます。

4. 「WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)」ページで、「**新規**」をクリックします。
5. 各フィールドに次のように入力します。

「名前」

64 ページの表 1 の JMS キューの列に示されているとおりの、新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の名前を入力します。

「JNDI 名 (JNDI Name)」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の JNDI 名を入力します。「名前」フィールドに入力したものと同一名前を使用します。

「ベース・キュー名 (Base Queue Name)」

WebSphere MQ に定義してあるメッセージ・キューの名前を入力します。このメッセージ・キューは、58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で定義したものです。

「ベース・キュー・マネージャー名 (Base Queue Manager Name)」

58 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。

「CCSID」

これは、WebSphere MQ キュー・マネージャーで使用する Coded Character Set Identifier (CCSID) です。このフィールドには 1208 を入力します。CCSID 1208 は、WebSphere MQ で使用される文字セットである UTF-8 です。

「ターゲット・クライアント (Target Client)」

`JMSErrorQueue` および `JMSOutboundQueue` の場合、「**MQ**」を選択します。他の JMS キューの場合には、「**JMS**」を選択してください。

他のフィールドはすべて無視してかまいません。

完了したら「**OK**」をクリックします。

各 JMS キューごとに、上記のステップを繰り返します。

JMS キューをすべて作成し終わったら、以下を行います。

1. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
2. 「保管」ページの「保管」をクリックします。

WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成

WebSphere MQ を使用するように WebSphere Commerce を構成するには、以下のようにしてトランスポート・アダプターを使用可能にしなければなりません。

1. WebSphere Commerce を停止します。WebSphere Commerce の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
3. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
4. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「コンポーネント」 → 「TransportAdapter」 を展開します。

ここで、*host_name* は WebSphere Commerce を実行しているマシンの短縮名で、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

5. 「使用可能」チェック・ボックスを選択します。
6. 「適用」をクリックします。
7. WebSphere Commerce 構成マネージャーを終了します。
8. WebSphere Commerce を始動します。WebSphere Commerce の始動の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

ご使用の WebSphere MQ 構成のテスト

WebSphere MQ の構成をテストするには、以下のメッセージを *hostname.inbounds* メッセージ・キューに挿入します。

```
<?xml test message>
```

 Windows の WebSphere MQ によってメッセージを挿入するには、以下を行います。

1. WebSphere MQ の資料の解説に従って、WebSphere MQ Explorer をオープンします。
2. *hostname.inbounds* を右クリックし、ポップアップ・メニューから「テスト・メッセージの書き込み (Put Test Message)」を選択します。
3. テスト・メッセージ・ウィンドウで、次のテキストを入力します。

```
<?xml test message>
```
4. 「OK」をクリックします。

他のプラットフォームでメッセージをメッセージ・キューに挿入する方法については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

次の事柄が生じるなら、WebSphere MQ は適切に構成されています。

- テスト・メッセージが、順次インバウンド・キュー (*hostname.inbounds*) からなくなる。
- エラー・メッセージが *hostname.outbound* キューに表示される。
- オリジナル・メッセージが *hostname.error* キューに表示される。

追加の WebSphere MQ 資料

WebSphere MQ タスクに関する情報は、以下の資料に記載されています。

 「WebSphere MQ システム管理ガイド」

 「WebSphere MQ for iSeries システム管理ガイド」

 「WebSphere MQ システム管理ガイド」

 「WebSphere MQ システム管理ガイド」

「WebSphere MQ システム管理ガイド」は、以下の Web サイトから入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/crosslatest.html>

「WebSphere MQ for iSeries システム管理ガイド」は、以下の Web サイトから入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/platspecific.html>

注: Web アドレスは、紙面の都合上 2 行に分けて書いてありますが、1 行内に入力してください。

第 8 章 IBM CrossWorlds InterChange Server

WebSphere Commerce は CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターを提供します。このアダプターは、CrossWorlds Server Access Interface (SAI) を使用する IBM CrossWorlds InterChange Server との WebSphere Commerce ビジネス・インテグレーションを拡張する、新しいメカニズムを提供します。CrossWorlds SAI は、外部プロセスが CrossWorlds InterChange Server 内部でコラボレーションを実行できるようにする、プログラミング・インターフェースです。CrossWorlds 用のアダプターを使用すれば、IBM CrossWorlds InterChange Server を介して外部システムに同期メッセージを送信することにより、WebSphere Commerce はそれらのシステムと統合することができます。このアダプターを使うと、WebSphere Commerce は CrossWorlds サーバーにメッセージを送って応答を待機することができます。応答を得た後で呼び出しコマンドを使って、引き続き他のビジネス・ロジックを実行することができます。

IBM CrossWorlds システムは、ソフトウェア統合製品の集合ですが、その中には、ビジネス統合のための共通要件に対処するための、コラボレーションという名前の既製のビジネス・ロジック・テンプレートと、開発と管理のための各種ツールが組み込まれています。コラボレーションとは、オーダー管理やマテリアル管理の請求書作成といった業界別の共通ビジネス・プロセス・ステップを定義および自動化するものです。またコラボレーションを使うと、多様な企業ソフトウェア製品の統制と拡張や、それらの製品相互での有意義なデータ交換の簡便化を図ることができます。

Oracle IBM CrossWorlds InterChange Server V4.1.1 は Oracle8i (8.1.7.0) をサポートしますが、Oracle 9i はサポートしません。

注: IBM CrossWorlds InterChange Server 用の WebSphere Commerce アダプターは、以下に示すハードウェア・プラットフォームで稼働している OS/400 または Linux ではサポートされません。

- @server iSeries システム
- @server pSeries™ システム
- @server zSeries® および S/390® システム

IBM CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターは、Intel® プロセッサ・ベースのシステムで稼働する Linux に関してサポートされます。

CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターの構成

CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターを構成するには、以下のようになります。

1. 70 ページの『CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターに関する前提条件』に一覧で示されている前提条件が満たされていることを確認してください。

2. 永続的 .IOR ファイルを生成するように IBM CrossWorlds InterChange Server を構成します。詳細は、71 ページの『永続的 ORB 間参照ファイルの生成のための IBM CrossWorlds InterChange Server の構成』を参照してください。
3. WebSphere Commerce と IBM CrossWorlds がそれぞれ異なるマシンにインストールされている場合、一部の IBM CrossWorlds ファイルを WebSphere Commerce にコピーする必要があります。詳細は、72 ページの『WebSphere Commerce マシンへの IBM CrossWorlds ファイルのコピー』を参照してください。
4. IBM CrossWorlds JAR ファイルを WebSphere Commerce の WebSphere Application Server クラスパスに追加します。詳細は、73 ページの『WebSphere Application Server クラスパスへの IBM CrossWorlds JAR ファイルの追加』を参照してください。
5. WebSphere Commerce を IBM CrossWorlds に接続できるようにします。詳細は、74 ページの『IBM CrossWorlds 接続の使用可能化』を参照してください。

CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターに関する前提条件

CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターの構成を始める前に、何台のマシンを使用する予定であるかと、以下をインストール済みであることを確認してください。

- WebSphere Commerce バージョン 5.5 Business または Professional Edition。
詳細は、「*WebSphere Commerce インストール・ガイド*」を参照してください。
- IBM CrossWorlds InterChange Server バージョン 4.1.1 に付属している VisiBroker Object Request Broker。

インストールの詳細は、「*IBM CrossWorlds System Integration Installation Guide*」を参照してください。

WebSphere Commerce と CrossWorlds InterChange Server が別々のマシンにインストールされている場合、WebSphere Commerce のマシンに VisiBroker Object Request Broker をインストールしてください。

- IBM CrossWorlds InterChange Server バージョン 4.1.1

インストールの詳細は、「*IBM CrossWorlds System Integration Installation Guide*」を参照してください。

CrossWorlds InterChange Server および VisiBroker Object Request Broker の追加情報は、以下の URL の CrossWorlds InfoCenter から入手できます。

<http://www.ibm.com/software/integration/cw/library/infocenter>

Solaris オペレーティング環境のユーザーに関する重要な注意事項

Solaris オペレーティング環境に IBM CrossWorlds InterChange Server バージョン 4.1.1 または VisiBroker Object Request Broker をインストールする前に、「*Installing IBM CrossWorlds Interchange Server on Sun Microsystem Solaris with multiple JDK versions installed*」技術情報を確認してください。技術情報には、以下の方法でアクセスできます。

1. Web ブラウザーをオープンして、以下の URL に移動します。

<http://www.ibm.com/support/search/index.html>

2. 「**検索語の入力 (Enter search terms)**」フィールドに以下の番号を入力します。

1066319

3. 「**送信**」をクリックします。

検索で戻される項目は、「*Installing IBM CrossWorlds Interchange Server on Sun Microsystem Solaris with multiple JDK versions installed*」技術情報だけになるはずですが。

別の方法としては、「**検索語の入力 (Enter search terms)**」フィールドに以下のテキストを入力することもできます。

Installing IBM CrossWorlds Interchange Server on Sun Microsystem Solaris with multiple JDK versions installed

注: CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターは、WebSphere Commerce メッセージング・システムの sendReceiveImmediate 送信サービスだけをサポートします。このアダプターでは、タイムアウトのサポートはありません。要求に対する応答をコラボレーションが待機する場所であるポートを、IBM CrossWorlds Connector for MQSeries などのタイムアウト・サポートをもつアダプターにバインドすることをお勧めします。IBM CrossWorlds Connector for MQSeries の詳細は、「*Guide to the IBM CrossWorlds Connector for MQSeries*」を参照してください。

この資料は、以下の Web アドレスから入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/websphere/crossworlds/library/doc/v411/connectors/mqseries/mqseries.pdf>

上記の Web アドレスは、紙面の都合で複数行に分かれていますが、1 行内に入力してください。

永続的 ORB 間参照ファイルの生成のための IBM CrossWorlds InterChange Server の構成

IBM CrossWorlds InterChange Server をブートアップすると、サーバーは新しい ORB 間参照 (.IOR) ファイルを生成します。ICS のブート時に、そのつど .IOR ファイルの内容を同一に保つには、永続的 .IOR ファイルを生成しなければなりません。

永続的 .IOR ファイルを生成するように IBM CrossWorlds InterChange Server を構成するには、次のようにします。

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
CrossWorlds_install_directory/InterchangeSystem.cfg
```

CrossWorlds_install_directory のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

2. 以下のテキストを手掛かりに、ファイルの CORBA サブセクションを検索してください。

```
[CORBA]
```

3. CORBA サブセクションは次のようなものであることを確認してください。

```
[CORBA]
```

```
OAPort=ORB_Smart_Agent_listening_port
```

ただし *ORB_Smart_Agent_listening_port* は、IBM CrossWorlds VisiBroker スマート・エージェント Object Request Broker (ORB) サービスが listen するポートの番号です。このポートの番号は、IBM CrossWorlds VisiBroker のインストール時に **OSAGENT_PORT** フィールドに入力した番号になります。

InterchangeSystem.cfg ファイルに CORBA サブセクションが欠落している場合、ファイルの末尾に CORBA サブセクションを追加します。

4. 変更をすべて保管してから、テキスト・エディターを終了します。

アクセス・クライアントがネットワーク非武装ゾーン (DMZ) 内にあって、IBM CrossWorlds InterChange Server マシンが別の TCP/IP サブネット上にある場合、Visibroker スマート・エージェント ORB サービスのポート番号がオープンされていることを確認します。

IBM CrossWorlds VisiBroker の詳細は、「*CrossWorlds System Installation Guide for Windows*」を参照してください。

WebSphere Commerce マシンへの IBM CrossWorlds ファイルのコピー

この後のステップを実行するには、以下の IBM CrossWorlds ファイルが WebSphere Commerce マシン上で利用可能でなければなりません。

- *CrossWorlds_installdir/CrossWorldsInterChangeServer.ior*
- *CrossWorlds_installdir/lib/CrossWorlds.jar*
- *VisiBroker_installdir/lib/vbjorb.jar*

CrossWorlds_installdir および *VisiBroker_installdir* のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

IBM CrossWorlds と WebSphere Commerce が同じマシン上にインストールされていない場合、それらを WebSphere Commerce マシンにコピーしなければなりません。

ファイルを WebSphere Commerce マシンにコピーした後、WebSphere Commerce マシンでのそれらのファイルの絶対パスのメモをとってください。そのパスは、後

のステップで必要になります。この章の解説では、IBM CrossWorlds ファイルは以下のディレクトリーにコピーされることを想定しています。

`WC_installdir/CrossWorlds`

`WC_installdir` のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

WebSphere Application Server クラスパスへの IBM CrossWorlds JAR ファイルの追加

`vbjorb.jar` ファイルと `CrossWorlds.jar` ファイルを WebSphere Application Server クラスパスに追加するには、WebSphere Commerce マシンで次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (`server1`) を始動します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソール をオープンします。詳細は、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「サーバー (**Servers**)」を展開して、「アプリケーション・サーバー (**Application Servers**)」を選択します。「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」ページが表示されます。
5. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「サーバーのブラウズ (**Browse Servers**)」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「OK」をクリックします。「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」ページが表示されます。
 - d. 「適用」をクリックします。
6. 「一般プロパティ (General Properties)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「プロセス定義 (**Process Definition**)」をクリックします。「プロセス定義 (Process Definition)」ページが表示されます。
7. 「プロセス定義 (Process Definition)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「Java 仮想マシン (**Java Virtual Machine**)」をクリックします。「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」ページが表示されます。
8. 「一般プロパティ (**General Properties**)」表で、以下のパスのうちの 1 つを「**Classpath**」フィールドに追加します。
 - WebSphere Commerce と IBM CrossWorlds が同一マシン上にインストールされている場合、以下のパスを使用します。

```
CrossWorlds_installdir/lib/CrossWorlds.jar
VisiBroker_installdir/lib/vbjorb.jar
```
 - WebSphere Commerce と IBM CrossWorlds が別々のマシン上にインストールされている場合、以下のパスを使用します。

```
WC_installdir/CrossWorlds/CrossWorlds.jar
WC_installdir/CrossWorlds/vbjorb.jar
```

CrossWorlds_installdir、*VisiBroker_installdir*、および *WC_installdir* のデフォルト値は、*v* ページの『パス変数』に一覧で示されています。

9. 「OK」をクリックします。
10. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
11. 「保管」ページで、「ノードとの変更の同期化 (Synchronize changes with node)」を選択します。
12. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
14. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

IBM CrossWorlds 接続の使用可能化

この項のステップを完了するには、以下の情報が手元になければなりません。

CrossWorlds_login

これは、IBM CrossWorlds InterChange Server への接続時に使用する IBM CrossWorlds InterChange Server ログイン名です。

wcs_encrypt_CrossWorlds_password

これは、IBM CrossWorlds InterChange Server への接続時に使用する IBM CrossWorlds InterChange Server ログイン・パスワードの ASCII 暗号化ストリングです。このパスワードは、WebSphere Commerce *wcs_encrypt* ユーティリティーを使って暗号化されます。デフォルトの未暗号化 CrossWorlds ログイン・パスワードは `null` です。

WebSphere Commerce *wcs_encrypt* ユーティリティーを使って IBM CrossWorlds InterChange Server ログイン・パスワードを暗号化するには、コマンド・プロンプトから次のようなコマンドを発行します。

```
 WC_installdir/bin/wcs_encrypt.sh CrossWorlds_password
```

```
 WC_installdir/bin/wcs_encrypt.sh CrossWorlds_password
```

```
 WC_installdir/bin/wcs_encrypt.sh CrossWorlds_password
```

```
 WC_installdir/bin/wcs_encrypt.sh CrossWorlds_password
```

```
 WC_installdir%bin%wcs_encrypt CrossWorlds_password
```

ただし *CrossWorlds_password* は、未暗号化の CrossWorlds ログイン・パスワードです。 *WC_installdir* のデフォルト値は、*v* ページの『パス変数』に一覧で示されています。

wcs_encrypt ユーティリティからの「**ASCII 暗号化ストリング (ASCII encrypted string)**」出力を *wcs_encrypt_CrossWorlds_password* の値として使用します。

WebSphere Commerce を IBM CrossWorlds に接続できるようにするには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce を停止します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. 以下のファイルのバックアップ・コピーを作成します。

```
WC_installdir/instance/instance_name/xml/instance_name.xml
```

ただし *instance_name* は、WebSphere Commerce インスタンスの名前です。*WC_installdir* のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

3. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
WC_installdir/instance/instance_name/xml/instance_name.xml
```

ただし *instance_name* は、WebSphere Commerce インスタンスの名前です。*WC_installdir* のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

4. 次のようなテキストを探し出して、CrossWorlds Server Access Interface (SAI) の指定を見つけます。

```
CWSAI
```

次のようなタグで始まる CrossWorlds SAI OutboundConnector エLEMENTの内容を編集することになります。

```
<OutboundConnector default="true"
  id="5"
  name="CWSAI"
  retries="3">
```

重要

WebSphere Commerce インスタンス・ファイル *instance_name.xml* には、複数の OutboundConnector エLEMENTが入っています。CrossWorlds SAI OutboundConnector エLEMENTにのみ変更を加えるように注意してください。変更を他のどの OutboundConnector エLEMENTに加えても、WebSphere Commerce において不測の動作が生じる可能性があります。

5. 次のようなサブELEMENTを見つけ出します。

```
<EditableProperty Admin="userName"
  display="false"
  editable="Yes"
  name="setUserName"
  value=""/>
```

value 属性を *value="CrossWorlds_login"* に変更します。ただし *CrossWorlds_login* は、IBM CrossWorlds InterChange Server への接続に使用される CrossWorlds ログイン名です。

6. 次のようなサブエレメントを見つけ出します。

```
<UnEditableProperty display="false"
                    editable="No"
                    encrypt="Yes"
                    name="setUserPassword"
                    value=""/>
```

value 属性を value="wcs_encrypt_CrossWorlds_passworld" に変更します。ただし wcs_encrypt_CrossWorlds_passworld は、WebSphere Commerce wcs_encrypt ユーティリティーによって暗号化された、ASCII 暗号化バージョンの CrossWorlds ログイン・パスワードです。

7. 次のようなサブエレメントを見つけ出します。

```
<EditableProperty Admin="iorFile"
                  display="false"
                  editable="Yes"
                  name="setIorFile"
                  value=""/>
```

value 属性を次のように変更します。

- WebSphere Commerce と IBM CrossWorlds が同一マシン上にインストールされている場合、次のようにします。

```
value="CrossWorlds_installdir/CrossWorldsInterChangeServer.ior"
```

- WebSphere Commerce と IBM CrossWorlds が別々のマシン上にインストールされている場合、以下のパスを使用します。

```
value="WC_installdir/CrossWorldsInterChangeServer.ior"
```

CrossWorlds_installdir と WC_installdir のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

8. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。
9. WebSphere Commerce を始動します。詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

次のステップ

CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターの構成を完了したら、以下を行うことができます。

- CheckInventoryAvailabilityBE メッセージとコマンドを構成します。これに関する詳細は、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプを参照してください。
- CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターを使用可能および使用禁止にします。これに関する詳細は、「WebSphere Commerce 管理ガイド」を参照してください。
- CrossWorlds InterChange Server 用のアダプターのトラブルシューティングを行います。これに関する詳細は、「WebSphere Commerce 管理ガイド」を参照してください。

第 6 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce

| WebSphere Commerce でディレクトリー・サーバーを使用するには、以下の各章の
| 指示どおりに実行します。

- | 1. 79 ページの『第 9 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリ
| ー・サーバーの構成』
- | 2. 87 ページの『第 10 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成』

+ このセクションの説明は、ユーザーがデフォルトのルートの組織またはデフォルト
+ の組織構造体を使用して、LDAP サーバーを構成していることを前提としていま
+ す。組織の構造体について特定の構成をカスタマイズすることができますが、カス
+ タマイズされた組織構造体に関する説明は用意されていません。

第 9 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリー・サーバーの構成

以下に示す表は、各種オペレーティング・システムの WebSphere Commerce によってサポートされるディレクトリー・サーバーを示しています。

ディレクトリー・サーバー	WebSphere Commerce が稼働する オペレーティング・システム				
	AIX	Linux	400	Solaris	Windows
IBM Directory Server バージョン 4.1	X			X	
IBM Directory Server バージョン 4.1.1					X
IBM Directory Server バージョン 5.1/5.1P	X	X		X	X
IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービス	X				X
IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービス	X				X
IBM OS/400 Directory Services			X		
Microsoft® Windows 2000 Active Directory					X
Sun ONE Directory Server 5.0				X	

注:

- IBM Directory Server バージョン 4.1 および 4.1.1 には DB2 Universal Database バージョン 7.1 が必要です。
- IBM Directory Server バージョン 5.1 は、@server xSeries® 上の Linux、および @server zSeries と S/390 上の Linux に関してサポートされます。IBM Directory Server バージョン 5.1P は、@server iSeries 上の Linux および @server pSeries 上の Linux に関してサポートされます。
- 以下に示す LDAP サーバーは、WebSphere Commerce バージョン 5.5 フィックスパック 3 以上が必要です。
 - IBM Directory Server Version 5.1 for AIX and Windows
 - IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービス
 - IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービス
 - Microsoft Windows 2000 Active Directory
 - Sun ONE Directory Server 5.0

WebSphere Commerce とともに使用するディレクトリー・サーバーに応じて、以下に示すセクションの 1 つの指示に従ってください。

- + 『WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成』
- + 『WebSphere Commerce で使用するための IBM Lotus Domino LDAP サービスの構成』
- + 81 ページの『WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成』
- + 84 ページの『WebSphere Commerce で使用するための Microsoft Windows 2000 Active Directory の構成』
- + 84 ページの『WebSphere Commerce で使用するための Sun ONE Directory Server 5.0 の構成』

WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成

+ **前提条件:** このセクションのタスクを実行する前に、以下を完了していることを確認してください。

- + — WebSphere Commerce をインストールして構成します。
- + — 使用する IBM Directory Server のバージョンに関する IBM Directory Server の指示に従って IBM Directory Server をインストールして構成します。

| WebSphere Commerce とともに稼働するように IBM Directory Server を構成するには、次のようにします。

- | 1. 以下に示す接尾部識別名 (DN) をディレクトリーに追加します。

| o=root organization

- | 2. ディレクトリー・サーバーを再始動します。

- | 3. 以下に示す組織の相対識別名 (RDN) をディレクトリーに追加します。

| o=root organization

| この組織には、親 DN はありません。

- | 4. 以下に示す組織の RDN を o=root organization RDN の子としてディレクトリーに追加します。

| o=default organization

| これらのタスクを完了する方法については、使用する IBM Directory Server のバージョンの資料を参照してください。

WebSphere Commerce で使用するための IBM Lotus Domino LDAP サービスの構成

+ **前提条件:** このセクションのタスクを実行する前に、以下を完了していることを確認してください。

- + — WebSphere Commerce をインストールして構成します。
- + — WebSphere Commerce フィックスパック 3 を適用します。
- + — 使用する IBM Lotus Domino のバージョンに応じた IBM Lotus Domino の資料に従って、IBM Lotus Domino LDAP サービスをインストールして構成します。

WebSphere Commerce とともに稼働するように IBM Lotus Domino LDAP サービスを構成するには、次のようにします。

1. Domino サーバーを構成するときに、「LDAP ユーザー書き込みアクセスの許可 (Allow LDAP users write access)」を「はい (Yes)」に設定します。
2. 使用する Lotus Domino のバージョンに応じて、以下の 1 つを実行します。

Lotus Domino バージョン 5

以下に示す組織を Domino ディレクトリーに追加します。

- o=root organization
- ou=default organization/o=root organization

Lotus Domino バージョン 6

以下に示す組織を Domino ディレクトリーに追加します。

- o=root organization
- o=default organization/o=root organization

これらのタスクを実行するための説明については、IBM Lotus Domino の資料を参照してください。

WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成

WebSphere Commerce で使用するために IBM OS/400 Directory Services を構成する前に、必要なパッチがインストールされていることを確認する必要があります。

WebSphere Commerce とともに稼働するように IBM OS/400 Directory Services を構成するには、次のようにします。

1. IBM OS/400 Directory Services を実行する iSeries マシン上の IBM OS/400 Directory Services に接尾部を追加します。『IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加』を参照してください。
2. IBM OS/400 Directory Services を実行する iSeries マシン上のディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーを作成します。82 ページの『ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成』を参照してください。

IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加

IBM OS/400 Directory Services に接尾部を追加するには、次のようにします。

1. iSeries コマンド行から次のようなコマンドを発行して、IBM OS/400 Directory Services が実行中であることを確認します。

```
WRKSBSJOB QSYSWRK
```

ジョブ QDIRSRV がユーザー・プロファイル QDIRSRV で実行中であれば、IBM OS/400 Directory Services は実行中です。

IBM OS/400 Directory Services が実行していない場合、OS/400 の資料に従ってジョブを開始してください。

2. Windows マシンで、iSeries Navigator を始動します。それには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM iSeries Access for Windows」 → 「iSeries Navigator」を選択します。
3. ターゲットの iSeries マシンへの接続がまだなければ、接続を作成します。
4. 左側のパネルでターゲット・マシンを展開します。
5. 左側のパネルで 「ネットワーク (Network)」 → 「サーバー (Servers)」を展開します。
6. 左側のパネルの 「TCP/IP」をクリックします。
7. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。
8. 「ディレクトリーのプロパティ (Directory Properties)」ウィンドウで、「データベース/接尾部 (Database/Suffixes)」タブをクリックします。
9. 「新規接尾部 (New suffix)」フィールドで o=root organization を指定します。
10. 「追加」をクリックします。
11. 「OK」ボタンをクリックします。IBM OS/400 Directory Services を即時または後刻のどちらかに再始動するかをたずねられます。後からの IBM OS/400 Directory Services の再始動を選択することもできますが、先に進むには IBM OS/400 Directory Services を再始動する必要があります。

後で IBM OS/400 Directory Services を再始動するよう選択した場合、次のようにして IBM OS/400 Directory Services を再始動することができます。

1. Windows マシンで、iSeries Navigator を始動します。それには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM iSeries Access for Windows」 → 「iSeries Navigator」を選択します。
2. ターゲットの iSeries マシンへの接続がまだなければ、接続を作成します。
3. 左側のパネルでターゲット・マシンを展開します。
4. 左側のパネルで 「ネットワーク (Network)」 → 「サーバー (Servers)」を展開します。
5. 左側のパネルの 「TCP/IP」をクリックします。
6. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「停止」を選択します。
7. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「スタート」を選択します。

ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成

ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーを作成するには、IBM OS/400 Directory Services を実行するサーバーで次のようにします。

1. 以下のようにして Directory Management Tool を始動します。
 - a. OS/400 システムで、iSeries コマンド行に次のようなコマンドを入力して、IBM OS/400 Directory Services を始動します。

```
STRTCPSVR *DIRSRV
```

b. Windows マシンでは、次のようにします。

- 1) 「スタート」→「プログラム」→「IBM Directory 4.1」→「ディレクトリー管理ツール (Directory Management Tool)」を選択して、IBM Directory Server Directory Management Tool を始動します。
- 2) 「サーバーの追加 (Add Server)」をクリックしてから、IBM OS/400 Directory Services を実行している iSeries マシンのホスト名を指定します。
- 3) 認証タイプとして「シンプル」を選択します。
- 4) ユーザー DN (たとえば、cn=Administrator) とパスワードを入力します。
- 5) 「OK」をクリックします。

2. 「サーバーの追加 (Add Server)」をクリックします。

3. ユーザー DN とパスワードを該当するフィールドに入力します。「OK」をクリックします。

注: 「There is no data for o=root organization. (o=root organization のデータがありません)」と知らせるエラーが出されることがあります。このエラーは無視しても安全です。「OK」をクリックして、次へ進んでください。

4. `ldap://hostname:389` を選択し、「追加」ボタンをクリックします。

この *hostname* は、IBM OS/400 Directory Services を実行している iSeries マシンの完全修飾ドメイン名です。

- 「エントリー・タイプ (Entry Type)」フィールドで、「組織 (Organization)」を選択します。
- 「エントリー RDN (Entry RDN)」フィールドに、`o=root organization` を入力します。
- 「OK」をクリックしてから「追加」をクリックして、変更を追加します。

5. `o=root organization` を選択して、「追加」ボタンをクリックします。

- 「エントリー・タイプ (Entry Type)」フィールドで、「組織 (Organization)」を選択します。
- 「親 DN (ParentDN)」フィールドに `o=root organization` と入力します。
- 「エントリー RDN (Entry RDN)」フィールドに、`o=default organization` と入力します。
- 「OK」をクリックしてから「追加」をクリックして、変更を追加します。

ディレクトリー・ツリーは最新表示され、追加した変更内容が表示されます。ディレクトリー・ツリーが最新表示にならない場合、「ディレクトリー・ツリー (Directory Tree)」→「ツリーの最新表示 (Refresh Tree)」を選択して、更新済みの変更内容を表示します。

+ WebSphere Commerce で使用するための Microsoft Windows 2000 + Active Directory の構成

+ 前提条件: このセクションのタスクを実行する前に、以下を完了していることを確認
+ してください。

- + — WebSphere Commerce をインストールして構成します。
- + — WebSphere Commerce フィックスパック 3 を適用します。
- + — 以下に示す Windows 2000 コンポーネントがディレクトリー・サーバー・マ
+ シンにインストールされていることを確認します。
 - + – Active Directory
 - + – Internet Information Service (IIS)
 - + – Certificate Services for Enterprise Root Certificate Authority (CA)
- + これらのコンポーネントのインストールの方法については、Windows 2000 の
+ 資料を参照してください。
- + — Active Directory の管理者がドメイン管理者の権限を持っていることを確認し
+ ます。
- + — 証明書サービスが、64 ベース・エンコードの CA 証明書をダウンロードでき
+ るように正しく構成されていることを確認します。

+ WebSphere Commerce とともに稼働するように Microsoft Windows 2000 Active
+ Directory を構成するには、次のようにします。

- + 1. 以下に示す組織の相対識別名 (RDN) をディレクトリーに追加します。

+ ou=root organization

+ この組織は、ドメイン・コントローラーの下になければなりません。たとえば、
+ ou=root organization, dc=ibm, dc=com。

- + 2. 以下に示す組織の RDN を ou=root organization RDN の子としてディレクト
+ リーに追加します。

+ ou=default organization

+ これらのタスクを実行するための説明については、Microsoft Windows 2000 Active
+ Directory の資料を参照してください。

+ WebSphere Commerce で使用するための Sun ONE Directory Server + 5.0 の構成

+ 前提条件: このセクションのタスクを実行する前に、以下を完了していることを確
+ 認してください。

- + — WebSphere Commerce をインストールして構成します。
- + — WebSphere Commerce フィックスパック 3 を適用します。
- + — Sun ONE Directory Server 5.0 の資料に従って Sun ONE Directory Server 5.0
+ をインストールして構成します。

+ WebSphere Commerce とともに稼働するように IBM Directory Server を構成するに
+ は、次のようにします。

- + 1. 以下に示す接尾部識別名 (DN) をディレクトリーに追加します。

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+

o=root organization

2. ディレクトリー・サーバーを再始動します。
3. 以下に示す組織の相対識別名 (RDN) をディレクトリーに追加します。

o=root organization

この組織には、親 DN はありません。

4. 以下に示す組織の RDN を o=root organization RDN の子としてディレクトリーに追加します。

o=default organization

これらのタスクを実行するための説明については、Sun ONE Directory Server の資料を参照してください。

|
|
|
|
|

次のステップ

この章の解説どおりに処理した後で、87 ページの『第 10 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成』の解説を参考に、LDAP 用に WebSphere Commerce を構成します。

第 10 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成

- + LDAP 用の WebSphere Commerce を構成するには、以下のようにします。
- + ステップ 1. 『WebSphere Commerce の準備』
- + ステップ 2. 91 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP
- + の使用可能化』
- + ステップ 3. 使用する LDAP サーバーに応じて、次の 1 つを実行します。
 - + • 93 ページの『IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスの
 - + ために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステッ
 - + プ』
 - + • 94 ページの『Microsoft Windows 2000 Active Directory のために
 - + WebSphere Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステッ
 - + プ』
- + 使用する LDAP サーバーがここにリストされていない場合、次のステ
- + ップに進んでください。
- + ステップ 4. 95 ページの『LDAP で使用するためのサンプル・ストア・アーカイブ
- + の更新』
- + ステップ 5. 96 ページの『WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーション
- + の使用可能化』
- + ステップ 6. 98 ページの『LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能
- + 化』
- + ステップ 7. 99 ページの『WebSphere Commerce での LDAP のテスト』

+ WebSphere Commerce の準備

+ IBM Directory Server、 IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービス、IBM
+ OS/400 Directory Services、または Sun ONE Directory Server 5.0 を使用している場
+ 合、このセクションをとばして、91 ページの『WebSphere Commerce 構成マネー

+ ージャーにおける LDAP の使用可能化』に進んでください。

+ WebSphere Commerce とともに使用するディレクトリー・サービスに応じて、以下
+ に示すセクションの 1 つの指示を実行してください。

- + • 『IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのための WebSphere
- + Commerce の準備』
- + • 88 ページの『Microsoft Windows 2000 Active Directory のための WebSphere
- + Commerce の準備』

+ IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのための + WebSphere Commerce の準備

+ IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのために WebSphere Commerce
+ を準備するには、以下を実行します。

- + 1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```

+ WC_installdir/xml/ldap/ldapentry.xml
+
+ WC_installdir のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』に一覧で示されてい
+ ます。
+
+ 2. 以下に示す項目がファイルに存在していることを確認し、必要であればタグが太
+ 字のテキストと一致するように訂正します。
+
+ <entry entryName="User">
+   <ldapsetting>
+     <ldaprdn rdnName="uid" keyAttrName="logonId"
+       keyObjName="UserRegistry">
+     <ldapocs objClass="top;person;organizationalPerson;inetOrgPerson">
+     <ldapbase defaultBase="ou=Default Organization,o=Root Organization"
+       searchBase="o=Root Organization">
+     </ldapsetting>
+
+     .
+     .
+     .
+
+ <!--<map>
+   <objectAttribute attrName="lastName"/>
+   <objectAttribute attrName="firstName"/>
+   <objectSeparator attrSeparator="/"/>
+   <ldapAttribute name="cn" operation="replace" flow="wcsToLdap"/>
+ </map-->
+
+     .
+     .
+     .
+
+ <entry entryName="Organization">
+   <ldapsetting>
+     <ldaprdn rdnName="ou" keyAttrName="orgEntityName"
+       keyObjName="Organization">
+     <ldapocs objClass="top;organization">
+     <ldapbase defaultBase="o=Root Organization"
+       searchBase="o=Root Organization">
+     </ldapsetting>
+
+ 3. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。

```

Microsoft Windows 2000 Active Directory のための WebSphere Commerce の準備

Microsoft Windows 2000 Active Directory のために WebSphere Commerce を準備するには、次のようにします。

1. ドメイン・コントローラーに作成された証明書を、証明書のエクスポート・ウィザード (Certificate Export Wizard) によってエクスポートします。証明書は 64 ベースのエンコード形式でエクスポートする必要があります。

証明書のエクスポート・ウィザード (Certificate Export Wizard) を始動して、証明書をエクスポートする方法については、Windows の資料を参照してください。

2. エクスポートした証明書ファイルを WebSphere Commerce マシンにコピーします。
3. WebSphere Commerce マシンで、ドメイン・コントローラーのエクスポートした証明書を、以下のようにして WebSphere Application Server の有効な署名者の証明書に追加します。

- + a. 以下に示すプログラムを実行して、 IBM 鍵管理コンソールを始動します。
- + `WAS_installdir/bin/ikeman.bat`
- + `WAS_installdir` のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』 に示されています。
- + b. 「鍵データベース・ファイル (Key Database File)」 > 「開く (Open)」 を
- + 選択します。
- + c. 以下に従って「開く (Open)」 ダイアログに入力して、「OK」をクリックし
- + ます。

フィールド	値
鍵データベース・タイプ (Key database type)	JKS
ファイル名 (File Name)	cacerts
場所 (Location)	<code>WAS_installdir/java/jre/lib/security</code>

ファイルにアクセスしようとするパスワードを入力するように要求されま
す。 CACERTS ファイルのデフォルト・パスワードは `changeit` です。

- + d. 「追加 (Add)」 をクリックし、「ファイル (File)」 ダイアログの「CA の証
- + 明書の追加 (Add CA's Certificate)」に入力して、証明書を署名者の証明書の
- + リストに追加します。

ラベルの入力を要求されるときには、証明書に意味のあるラベル (たとえ
ば、Active Directory マシンの名前など) を指定するようにします。

- + e. 「鍵データベース・ファイル (Key Database File)」 > 「終了 (Exit)」 を選
- + 択して、 IBM 鍵データベース管理コンソールを終了します。

- + 4. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

`WC_installdir/xml/ldap/ldapentry.xml`

- + 5. 以下に示すタグのすべてのオカレンスを置き換えます。

```
<ldapbase
  defaultBase="o=Default Organization,o=Root Organization"
  searchBase="o=Root Organization"/>
```

以下で置き換えます。

```
<ldapbase
  defaultBase="ou=Default Organization,ou=Root Organization,
  domain_controller_reference"
  searchBase="ou=root organization,domain_controller_reference"/>
```

ここで、`domain_controller_reference` はドメイン・コントローラーへの拡張参照
です。

たとえば、ドメイン・コントローラーが `domain.ibm.com` である場合、
`domain_controller_reference` を以下のテキストに置き換えます。

`DC=domain,DC=ibm,DC=com`

その結果、タグは以下のようになります。

```
<ldapbase
  defaultBase="ou=Default Organization,ou=Root Organization,
  DC=domain,DC=ibm,DC=com"
  searchBase="DC=domain,DC=ibm,DC=com"/>
```

+ 6. 以下に示すタグのすべてのオカレンスを探します。

```
+ <ldapbase defaultBase="o=Root Organization"
+ searchBase="o=Root Organization"/>
```

+ すべてのオカレンスを以下に示すタグで置き換えます。

```
+ <ldapbase defaultBase="ou=Root Organization,domain_controller_reference"
+ searchBase="ou=Root Organization,domain_controller_reference"/>
```

+ ここで、*domain_controller_reference* はドメイン・コントローラーへの拡張参照
+ です。

+ たとえば、ドメイン・コントローラーが *domain.ibm.com* である場合、
+ *domain_controller_reference* を以下のテキストに置き換えます。

```
+ DC=domain,DC=ibm,DC=com
```

+ その結果、タグは以下のようになります。

```
+ <ldapbase defaultBase="ou=Root Organization,DC=domain,DC=ibm,DC=com"
+ searchBase="ou=Root Organization,DC=domain,DC=ibm,DC=com"/>
```

+ 7. 以下のようなタグを探します。

```
+ <ldaprdrn rdnName="uid" keyAttrName="logonId" keyObjName="UserRegistry"/>
+ <ldapocs objClass="top;person;organizationalPerson;inetOrgPerson"/>
```

+ タグを以下で置き換えます。

```
+ <ldaprdrn rdnName="cn" keyAttrName="logonId" keyObjName="UserRegistry"/>
+ <ldapocs objClass="top;person;organizationalPerson;user"/>
```

+ 8. 以下のようなタグを探します。

```
+ <map>
+ <objectAttribute attrName="logonPassword"/>
+ <ldapAttribute name="userPassword" operation="replace" flow="wscToLdap"/>
```

+ 以下を行います。

+ a. <map> タグの上に、以下のタグを挿入します。

```
+ <map>
+ <objectAttribute attrName="sAMAccountName"/>
+ <ldapAttribute name="sAMAccountName" operation="replace"
+ flow="wscToLdap"/>
+ </map>
+ <map>
+ <objectAttribute attrName="userAccountControl"/>
+ <ldapAttribute name="userAccountControl" operation="replace"
+ flow="wscToLdap"/>
+ </map>
```

+ b. 以下に示すタグを置き換えます。

```
+ <ldapAttribute name="userPassword" operation="replace" flow="wscToLdap"/>
```

+ 以下で置き換えます。

```
+ <ldapAttribute name="unicodePwd" operation="replace" flow="wscToLdap"/>
```

+ 9. 以下に示すタグを削除します。

```
+ <map>
+ <objectAttribute attrName="lastName"/>
+ <objectAttribute attrName="firstName"/>
+ <objectSeparator attrSeparator="/" />
+ <ldapAttribute name="cn" operation="replace" flow="wscToLdap"/>
+ </map>
```

- + 10. 以下のようなタグを探します。
- +

```
<ldaprdn rdnName="o" keyAttrName="orgEntityName" keyObjName="Organization"/>
```
- +

```
<ldapocs objClass="top;organization"/>
```
- + タグを以下で置き換えます。
- +

```
<ldaprdn rdnName="ou" keyAttrName="orgEntityName" keyObjName="Organization"/>
```
- +

```
<ldapocs objClass="top;organizationalUnit"/>
```
- + 11. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。

WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP の使用可能化

WebSphere Commerce 構成マネージャー内で LDAP を使用可能にするには、WebSphere Commerce を実行しているサーバー上で次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「商取引 (**Commerce**)」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」を展開します。

instance_name は更新する WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

5. 「メンバー・サブシステム (**Member Subsystem**)」を選択して、以下のようになります。
 - a. 「認証モード」フィールドで、「LDAP」を選択します。
 - b. 「LDAP タイプ」は **IBM Directory Server** となりますが、この時点では変更できません。

IBM Directory Server または IBM OS/400 Directory Services を使用しない場合、後から LDAP タイプを変更する必要があります。

- c. 「ホスト」フィールドに、LDAP サーバー・マシンの *host_name* を入力します。
- d. ポート番号が正しいことを確認します。ほとんどの LDAP サーバーのデフォルトの非 SSL ポート番号は 389 です。ほとんどの LDAP サーバーのデフォルトの SSL ポート番号は 636 です。

Microsoft Active Directory を使用する場合、SSL ポート番号を指定する必要があります。

- e. 「管理者識別名」フィールドに管理者の識別名を入力します。この識別名は、LDAP サーバーで使用されている名前と一致していなければなりません (たとえば、*cn=root* や *cn=Administrator* など)。

Microsoft Active Directory を使用する場合、管理者の識別名にはドメイン・コントローラーを含める必要があります。

たとえば、ドメイン・コントローラーが *domain.ibm.com* である場合、管理者の識別名の一部に *DC=domain,DC=ibm,DC=com* を含める必要があります。

- f. 「管理者のパスワード」フィールドに管理者のパスワードを入力します。
「確認パスワード」フィールドで、パスワードを確認する必要があります。
 - g. 「適用」をクリックします。
 - h. 「メンバー・サブシステムが **WebSphere Commerce** 用に正常に構成されました (**Successfully configured member subsystem for WebSphere Commerce**)」というウィンドウが表示されます。「OK」をクリックして、次へ進んでください。
6. 構成マネージャーを終了します。
 7. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

 `WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml`

 `WC_userdir/instances/
instance_name/xml/instance_name.xml`

 `WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml`

 `WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml`

 `WC_installdir\instances\instance_name\xml\instance_name.xml`

`WC_installdir` および `WC_userdir` のデフォルト値は、v ページの『パス変数』から入手することができます。

8. 次のようなテキストを探します。

```
PMAAdminId="Site_Admin_ID"
```

ここで、`Site_Admin_ID` は WebSphere Commerce サイト管理者 ID です。

9. このテキストを次のように変更します。

```
PMAAdminId="Site_Admin_long_DN"
```

ここで、`Site_Admin_long_DN` は、LDAP サーバーに存在する WebSphere Commerce サイト管理者 ID の完全な DN です。たとえば、`PMAAdminId="uid=wcsadmin,o=root organization"` です。

10. WebSphere Commerce とともに DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS を使用する場合、`DbLogonMaxLength` 属性を Directory 要素に追加する必要があります。`DbLogonMaxLength` 属性は 212 に設定されます。

更新を完了すると、ファイルの `MemberSubSystem` の部分が以下のようになります。

```
<MemberSubSystem AuthenticationMode="LDAP"
  ProfileDataStorage="LDAP"
  name="Member SubSystem">
  <Directory EntryFileName="../xml/ldap/ldapentry.xml"
    LdapAdminDN=""LdapAdminPW=""
    LdapAuthenticationMode="SIMPLE"
    LdapHost="localhost"
    LdapPort="389"
    LdapTimeOut="0"
    LdapType="SECUREWAY"
    LdapVersion="3"
    MigrateUsersFromWCSdb="ON"
```

```
+ SingleSignOn="0"  
+ display="false"  
+ DbLogonIdMaxLength="212" />  
+ </MemberSubSystem>
```

11. ファイルを保管します。
12. IBM Directory Server または IBM OS/400 Directory Services を使用しない場合、使用する LDAP サーバーに応じて以下のセクションのいずれかのステップを実行して続行します。
 - 『IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ』
 - 『IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ』
 - 94 ページの『Microsoft Windows 2000 Active Directory のために WebSphere Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステップ』
 - 94 ページの『Sun ONE Directory Server 5.0 のために WebSphere Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステップ』
13. IBM Directory Server または IBM OS/400 Directory Services を使用しない場合、WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を再始動して、これらの変更を有効にします。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

+ IBM Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

WC_installdir および WC_userdir のデフォルト値は、v ページの『パス変数』から入手することができます。

2. LdapType エントリを変更して以下に一致するようにします。

```
LdapType="DOMINO"
```

3. 変更内容を保管してテキスト・エディターを終了します。

WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を再始動して、これらの変更を有効にする必要があります。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

+ IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービスのために WebSphere Commerce を有効にするのに必要な追加のステップ

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

+ *WC_installdir* および *WC_userdir* のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』
+ から入手することができます。

2. *LdapType* エントリーを変更して以下に一致するようにします。

+ *LdapType*="DOMINO"

+ WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を再始動して、これ
+ らの変更を有効にする必要があります。 WebSphere Commerce および WebSphere
+ Commerce Payments の停止の詳細は、 121 ページの『WebSphere Commerce イン
+ スタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments
+ インスタンスの始動または停止』を参照してください。

+ Microsoft Windows 2000 Active Directory のために WebSphere + Commerce を使用可能にするのに必要な追加のステップ

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

+ *WC_installdir*¥instances¥instance_name¥xml¥instance_name.xml

+ *WC_installdir* および *WC_userdir* のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』
+ から入手することができます。

2. 以下に示すエントリーを、 Directory 要素の *EntryFileName* 属性の後に追加し
+ ます。

+ JNDIEnvPropName1="java.naming.security.protocol"
+ JNDIEnvPropName2="java.naming.referral"
+ JNDIEnvPropValue1="ssl"
+ JNDIEnvPropValue2="throw"

3. Directory 要素の *LdapType* 属性を変更して、以下と一致するようにします。

+ *LdapType*="ACTIVEDIR"

+ WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を再始動して、これ
+ らの変更を有効にする必要があります。 WebSphere Commerce および WebSphere
+ Commerce Payments の停止の詳細は、 121 ページの『WebSphere Commerce イン
+ スタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments
+ インスタンスの始動または停止』を参照してください。

+ Sun ONE Directory Server 5.0 のために WebSphere Commerce を使 + 用可能にするのに必要な追加のステップ

1. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

+ *WC_installdir*/instances/*instance_name*/xml/*instance_name*.xml

+ *WC_installdir* および *WC_userdir* のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』
+ から入手することができます。

2. *LdapType* エントリーを変更して以下に一致するようにします。

+ *LdapType*="IPLANET"

+ WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を再始動して、これ
+ らの変更を有効にする必要があります。 WebSphere Commerce および WebSphere
+ Commerce Payments の停止の詳細は、 121 ページの『WebSphere Commerce イン

- + d. 変更内容をファイルに保管します。
- + 3. SAR ファイル内のすべての XML および DTD ファイルが更新されたことを確認します。
- + 4. Microsoft Active Directory を使用する場合、以下に示す WebSphere Commerce 契約テンプレート・ファイルを更新します。
- + • `WC_installdir¥xml¥trading¥xml¥TemplateHostingContractSPS.xml`
- + • `WC_installdir¥xml¥trading¥xml¥TemplateHostingContractRPS.xml`
- + • `WC_installdir¥xml¥trading¥xml¥TemplateHostingContractMPS.xml`
- + • `WC_installdir¥xml¥trading¥xml¥DeploymentHostingContractMHS.xml`
- + • `WC_installdir¥xml¥trading¥xml¥DeploymentHostingContractRHS.xml`
- + これらのファイルを更新するには、以下を行います。
- + a. テキスト・エディターでファイルを開きます。
- + b. `o=root organization` のすべてのインスタンスを `ou=root organization, domain_controller_reference` に変更します。ここで、`domain_controller_reference` はドメイン・コントローラーへの拡張参照です。
- +
+ たとえば、ドメイン・コントローラーが `domain.ibm.com` である場合、`domain_controller_reference` を以下のテキストに置き換えます。
- +
+ `dc=domain,dc=ibm,dc=com`
- +
+ その結果、テキストは以下のようになります。
- +
+ `ou=root organization,dc=domain,dc=ibm,dc=com`
- + c. 変更内容を保管します。

WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの使用可能化

ユーザー・マイグレーションを使用可能にすると、現在 WebSphere Commerce データベースにプロファイルを有するユーザーは LDAP サーバーにマイグレーションすることができます。

WebSphere Commerce においてユーザー・マイグレーションを使用可能にするには、次のようにします。

- 『マイグレーションのための WebSphere Commerce のデータベース・エントリーの変更』の指示に従って、WebSphere Commerce データベースを更新します。
- 97 ページの『WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの有効化』の説明に従って、ユーザー・マイグレーションを有効にします。

マイグレーションのための WebSphere Commerce のデータベース・エントリーの変更

以下に示す LDAP サーバーの 1 つを使用する場合、このセクションの説明はスキップできます。

- IBM Directory Server
- IBM Lotus Domino バージョン 6 LDAP サービス
- IBM OS/400 Directory Services

+ • Sun ONE Directory Server 5.0

+ 使用する LDAP サーバーに応じて、次のようにします。

+ Microsoft Active Directory

+ 以下に示す SQL コマンドを実行して、WebSphere Commerce データベース
+ を更新します。

```
+ update orgentity  
+   set orgentitytype='OU',  
+     dn='ou=root organization,domain_controller'  
+   where orgentity_id=-2001  
+ update orgentity  
+   set orgentitytype='OU',  
+     dn='ou=default organization,ou=root organization,domain_controller'  
+   where orgentity_id=-2000  
+ update users  
+   set dn='cn=wcsadmin,ou=root organization,domain_controller'  
+   where users_id=-1000
```

+ ここで、*domain_controller* はドメイン・コントローラーへの拡張参照で
+ す。たとえば、ドメイン・コントローラーが *domain.ibm.com* である場合、
+ *domain_controller* を *dc=domain,dc=ibm,dc=com* に置き換えます。

+ Lotus Domino バージョン 5 LDAP サービス

+ 以下に示す SQL コマンドを実行して、WebSphere Commerce データベース
+ を更新します。

```
+ update orgentity  
+   set dn='ou=default organization,o=root organization'  
+   where orgentity_id=-2000
```

+ WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの有効化

WebSphere Commerce においてユーザー・マイグレーションを使用可能にするには、WebSphere Commerce を実行しているサーバーで次のようにします。

1. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を停止させます。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
> AIX WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
> 400 WC_userdir/instances/  
instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
> Linux WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
> Solaris WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
> Windows WC_installdir\instances\instance_name\xml\instance_name.xml
```

WC_installdir および WC_userdir のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』から入手することができます。

3. MigrateUsersFromWCSdb エントリーが "ON" に設定されていることを確認してください。この行は次のようになっているはずです。

```
MigrateUsersFromWCSdb="ON"
```

4. ファイルを保管します。
5. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を始動します。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の始動の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。
6. サイト管理者 ID を使用して、WebSphere Commerce 管理コンソールにログオンします。

サイト管理者 ID は WebSphere Commerce インスタンスの作成時に作成されたものです。

このステップでは、サイト管理者 ID を LDAP にマイグレーションします。

7. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を停止させます。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

+ 次にユーザーが WebSphere Commerce 管理ページまたは WebSphere Commerce ス
+ トアにログインするときに、ユーザー・プロファイルは LDAP サーバーにマイグ
+ レーションされます。

+ LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能化

+ Active Directory を使用する場合、または uid ではなく cn を使用する組織構造体
+ を使用する場合、以下を実行して LDAP の下で WebSphere Commerce Payments を
+ 使用可能にします。

1. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を停止させます。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server 管理コンソールを始動します。その方法については、126 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「サーバー (Servers)」 > 「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」 > 「wpm_instance_Commerce_Payments_Server」 > 「プロセス定義 (Process Definition)」 > 「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」 > 「カスタム・プロパティ (Custom Properties)」を展開します。

+ *wpm_instance* は、WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。た
+ とえば、wpm です。

- + 4. 「新規」をクリックします。
- + 5. 以下に示すプロパティを追加します。

+ *wpm_instance.LDAPUserIndicator*

+ ここで、*wpm_instance* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前で
+ す。たとえば、wpm です。

- + 6. プロパティに以下の値を指定します。

+ cn

- + 7. 「適用」をクリックして、変更を保管します。
- + 8. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
- + 9. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を始動します。
+ WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の始動の詳細は、
+ 121 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および
+ 122 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』
+ を参照してください。

+ LDAP の下で WebSphere Commerce Payments を使用可能にした後、 WebSphere
+ Commerce Payments コンソールにログオンするときに、サイト管理者の完全な識別
+ 名を指定する必要があります。 WebSphere Commerce Payments コンソールでは、
+ サイト管理者の短縮名を使用してログオンすることはできません。

+ WebSphere Commerce での LDAP のテスト

+ WebSphere Commerce で LDAP が正しく稼働することを確認するには、次のような
+ テストを実行します。

- + 1. WebSphere Commerce 管理者 ID を使用して、WebSphere Commerce 組織管理
+ コンソールにログオンします。
- + 2. WebSphere Commerce 管理者 ID がルートの組織の下に示されているかについ
+ て LDAP サーバーを確認します。

+ WebSphere Commerce 管理者 ID が LDAP サーバーのルートの組織の下に示さ
+ れていない場合、LDAP は WebSphere Commerce とともに使用できるように
+ 正しく構成されています。

- + 3. WebSphere Commerce 組織管理コンソールからログアウトします。
- + 4. LDAP サーバーの root organization 組織の下に新しいユーザーを作成しま
+ す。
- + 5. 新しいユーザー ID を使用して、WebSphere Commerce 組織管理コンソールへ
+ のログオンを試行します。

+ 以下に示すエラーが発生します。

+ User does not have the proper authority to logon

+ このエラーは、ユーザー ID は解決されたが、その ID には WebSphere
+ Commerce 組織管理コンソールにアクセスする権限がないことを示します。

+ その他のエラー・メッセージが表示される場合、認証が失敗し、ユーザーが正
+ しく作成されていないか、LDAP サーバーが WebSphere Commerce と協働する
+ ように正しく構成されていません。

- + 6. WebSphere Commerce 管理者 ID を使用して、WebSphere Commerce 組織管理
+ コンソールにログオンします。
- + 7. 新しいユーザー ID にサイト管理者の役割を割り当てます。
- + 8. WebSphere Commerce 組織管理コンソールからログアウトします。
- + 9. 新しいユーザー ID を使用して WebSphere Commerce アクセラレーターにログ
+ オンします。

+ ログインが正常に行われる場合、LDAP が WebSphere Commerce と協働する
+ ように正しく構成されていることを示します。

- + 10. (推奨) WebSphere Commerce 組織管理コンソールで、新しいユーザー ID から
+ サイト管理者の役割を除去します。

+ こうすることによって、誰かがこの新しいユーザー ID を使用して WebSphere
+ Commerce に変更を加えないように予防できます。

第 11 章 WebSphere Commerce で LDAP を使用不可にする

注意

LDAP を使用不可にすると、以下のことが生じます。

- WebSphere Commerce で LDAP が使用可能になってから作成されたユーザーは、自分のパスワードが WebSphere Commerce データベース内に存在しないので、WebSphere Commerce への認証を行えなくなります。
- WebSphere Commerce で LDAP が使用可能になってから自分のパスワードを変更したユーザーは、LDAP が使用可能になる前に持っていたパスワードによる、WebSphere Commerce へのアクセスしか行えません。現在の (LDAP) パスワードは WebSphere Commerce では機能しなくなります。
- ユーザーは完全な LDAP スタイル ID を使用して WebSphere Commerce にログインする必要があります。たとえば、ユーザー ID wcsadmin のユーザーは、uid=wcsadmin,o=root organization としてログインする必要があります。

WebSphere Commerce において Lightweight Directory Access Protocol を使用不可にするには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「商取引 (**Commerce**)」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」を展開します。
5. 「メンバー・サブシステム (**Member Subsystem**)」を選択して、以下のようになります。
 - a. 「認証モード」フィールドで、「データベース」を選択します。
 - b. 「適用」をクリックします。
 - c. 「メンバー・サブシステムが **WebSphere Commerce** 用に正常に構成されました (**Successfully configured member subsystem for WebSphere Commerce**)」というウィンドウが表示されます。「OK」をクリックして、次へ進んでください。
6. 構成マネージャーを終了します。

第 7 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント

WebSphere Commerce では、WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments をインストールすると、WebSphere Application Server 基本製品がインストールされます。追加の WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Commerce に付属しています。

- 105 ページの『第 12 章 WebSphere Application Server Network Deployment』
- 107 ページの『第 13 章 WebSphere Application Server Network Deployment Edge Component』
- 109 ページの『第 14 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit』

第 12 章 WebSphere Application Server Network Deployment

WebSphere Commerce には WebSphere Application Server Network Deployment が含まれていますが、WebSphere Application Server 基本製品は WebSphere Commerce Server または WebSphere Commerce Payments のインストール時にインストールされます。クラスタリング、エッジ・サービス、および分散構成の高可用性を含む、拡張されたデプロイメント・サービスを活用するには、WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしなければなりません。

WebSphere Application Server Network Deployment で使用可能なすべての機能の説明については、以下の URL を参照してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/was/network>

WebSphere Application Server Network Deployment のインストール

WebSphere Application Server Network Deployment に関する詳細は、「*WebSphere Application Server Network Deployment Getting started*」を参照してください。この資料は、WebSphere Application Server Network Deployment CD の docs ディレクトリー内の PDF ファイルとして入手できます。

注: パフォーマンス上の理由で、IBM は WebSphere Commerce とは異なるノードで WebSphere Application Server Network Deployment を使用するように推奨しています。

重要: 必ず WebSphere Application Server に適用されるすべてのフィックスを、WebSphere Application Server Network Deployment にも適用してください。

詳細は、WebSphere Commerce CD 1 の WebSphere Commerce README ファイルを参照してください。

WebSphere Commerce での統合およびクラスタリング

WebSphere Commerce での統合およびクラスタリングでの WebSphere Application Server Network Deployment の使用については、「*WebSphere Commerce インストール・ガイド*」を参照してください。

第 13 章 WebSphere Application Server Network Deployment Edge Component

WebSphere Application Server Network Deployment の Edge Component には、IBM SecureWay[®] Network Dispatcher (以前は eNetwork Network Dispatcher と呼ばれていた) および IBM Web Traffic Express ですすでに使用可能であった機能が含まれています。

WebSphere Application Server Network Deployment Edge Component で使用可能なすべての機能の説明については、以下の URL を参照してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/was/network/edge.html>

WebSphere Application Server Network Deployment Edge Component に関する詳細は、以下の WebSphere Application Server InfoCenter から入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>

第 14 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit

WebSphere Studio Application Server Toolkit は、4 つのコンポーネント (Debug コンポーネント、Trace コンポーネント、 WebSphere Log Analyzer、および Eclipse ワークベンチ) から成り立っています。

Application Server Toolkit に関する詳細は、以下の WebSphere Application Server InfoCenter を参照してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>

WebSphere Commerce 症状データベース

Application Server Toolkit で使用可能な WebSphere Log Analyzer ツールを、WebSphere Commerce ログ・ファイルで効果的に使用するために、症状データベースを Application Server Toolkit にインポートして、WebSphere Commerce 症状データベースをロギング・ツールで使用できるようにしなければなりません。

WebSphere Commerce 症状データベースは、以下の URL で入手できます。

```
ftp://ftp.software.ibm.com/software/websphere/info/tools/  
logalyzer/symptoms/wc/symptomdb.xml
```

この URL が複数の行で示されているのは、単に見やすくするためです。URL は 1 行で入力してください。

Application Server Toolkit の WebSphere Log Analyzer への、WebSphere Commerce 症状データベースのインポートに関する詳細は、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

第 8 部 IBM DB2 Text Extender バージョン 8

WebSphere Commerce システムのテキスト検索機能を強化したい場合には、DB2 Text Extender をインストールしてください。

400 IBM DB2 Text Extender バージョン 8 は、ライセンス交付を受けた別個の製品 (5722-DE1) として OS/400 for iSeries V5R2 で使用できますが、Unicode コード・ページで定義されたフィールドをサポートしません。WebSphere Commerce は Unicode コード・ページを使ってマルチリンガル・フィーチャーをサポートするので、WebSphere Commerce データベース・テーブルで DB2 Text Extender for iSeries を使用することはできません。DB2 Text Extender for iSeries は、WebSphere Commerce に組み込まれていません。

第 15 章 IBM DB2 Text Extender バージョン 8 のインストール

DB2 Text Extender をインストールするには、次のような資料中のインストール指示に従います。

 「DB2 Universal Database Text Extender Administration and Programming」

 「DB2 Universal Database Text Extender Administration and Programming」

 「DB2 Universal Database Text Extender Administration and Programming」

 「DB2 Universal Database Text Extender Administration and Programming」

iSeries の使用時の注意: DB2 Text Extender for iSeries には、WebSphere Commerce は組み込まれていません。

これらの資料は、以下の URL で入手できます。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/extenders/library.html>

第 9 部 追加ソフトウェア・タスク

第 9 部の解説では、本書に記載されている追加ソフトウェア・コンポーネントのインストールおよび構成時に実行する必要がある共通タスクまたはオペレーティング・システム別のタスクについて述べています。

第 16 章 WebSphere Commerce のタスク

ここでは、WebSphere Commerce に付属している追加ソフトウェアのインストールおよび構成時に完了する必要がある WebSphere Commerce タスクに関して、各オペレーティング・システムごとに解説しています。

WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

AIX、Linux、および Solaris オペレーティング環境での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

WebSphere Commerce 構成マネージャーを始動するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非ルート・ユーザー ID でログインします。

Solaris オペレーティング環境のユーザーに関する重要な情報

絶対に Bourne シェルで WebSphere Commerce コマンドを実行しないでください。Bourne シェルで WebSphere Commerce コマンドを実行すると、コマンドが失敗します。

その時点で Bourne シェルを使用している場合、すぐにシェルを切り替えてください。IBM では、WebSphere Commerce コマンドの実行時には Korn シェルを使用するように推奨しています。

2. 作成または変更するインスタンスに応じて、WebSphere Commerce ノードまたは WebSphere Commerce Payments ノードで以下のようにして、サーバーを始動します。
 - a. 端末ウィンドウをオープンします。
 - b. 次のようなコマンドを発行します。

```
cd WC_installdir/bin
./config_server.sh
```

WC_installdir のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

注:

- 1) config_server.sh コマンドを入力した端末ウィンドウをクローズしないでください。クローズすると、構成マネージャーは停止してしまいます。
- 2) バックグラウンド・プロセスとして構成マネージャー・サーバーを実行しないでください。これは、セキュリティ上のリスクにつながります。
- 3) これで、構成マネージャーがポート 1099 で接続を listen するようになりました。構成マネージャーに別のポートで listen させる場合、./config_server.sh コマンドの代わりに、以下のコマンドを発行します。

```
./config_server.sh -port port_number
```

この *port_number* は、構成マネージャーが接続を listen するポートです。

3. 以下のいずれかを行って、クライアントを始動します。

- ローカル・マシンで WebSphere Commerce 構成マネージャーを実行する場合、次のようにします。
 - a. 別の端末ウィンドウをオープンします。
 - b. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非ルート・ユーザー ID で、以下のコマンドを発行します。

```
export DISPLAY=host_name:0.0
cd WC_installdir/bin
./config_client.sh [-port cm_port]
```

ここで、変数は以下のように定義されます。

hostname

構成マネージャーへのアクセスに使用する予定のマシンの完全修飾ホスト名。

cm_port

構成マネージャー・サーバーの始動時に指定されるポート。

`-port` パラメーターはオプションです。 `-port` パラメーターを指定しない場合、構成マネージャー・クライアントがポート 1099 を使用して構成マネージャー・サーバーへの接続を試行します。

注: X クライアントが、 `xhost` コマンドを使用して X サーバーへのアクセスを許可される必要があるとします。 X クライアントに許可を与えるには、 `root` としてシステム・コンソールから以下のコマンドを発行します。

```
xhost +host_name
```

この *host_name* は、インストール・ウィザードの実行元のマシンの完全修飾ホスト名です。

- c. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。
- リモート・マシンで WebSphere Commerce 構成マネージャー・クライアントを実行する場合、以下を行います。
 - a. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非ルート・ユーザー ID で、リモート・マシンにログオンします。

Solaris オペレーティング環境のユーザーに関する重要な情報

絶対に Bourne シェルで WebSphere Commerce コマンドを実行しないでください。 Bourne シェルで WebSphere Commerce コマンドを実行すると、コマンドが失敗します。

その時点で Bourne シェルを使用している場合、すぐにシェルを切り替えてください。 IBM では、 WebSphere Commerce コマンドの実行時には Korn シェルを使用するように推奨しています。

- b. 端末ウィンドウをオープンします。
- c. 次のようなコマンドを発行します。

```
export DISPLAY=host_name:0.0
cd WC_installdir/bin
./config_client.sh -hostname cm_hostname [-port cm_port]
```

ここで、変数は以下のように定義されます。

hostname

構成マネージャーへのアクセスに使用する予定のマシンの完全修飾ホスト名。

cm_hostname

構成マネージャー・サーバー・マシンの完全修飾ホスト名。

cm_port

構成マネージャー・サーバーの始動時に指定されるポート。

-port パラメーターはオプションです。 -port パラメーターを指定しない場合、構成マネージャー・クライアントがポート 1099 を使用して構成マネージャー・サーバーへの接続を試行します。

WC_installdir のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

注: X クライアントが、 *xhost* コマンドを使用して X サーバーへのアクセスを許可される必要があるとします。 X クライアントに許可を与えるには、 *root* としてシステム・コンソールから以下のコマンドを発行します。

```
xhost +host_name
```

この *host_name* は、インストール・ウィザードの実行元のマシンの完全修飾ホスト名です。

- d. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。

OS/400 での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

OS/400 で WebSphere Commerce 構成マネージャーを始動するには、次のようになります。

1. 次のようして、構成マネージャー・サーバーを始動します。
 - a. プロファイルに *SECOFR ユーザー・クラスがあり、なおかつ英語または各自のインスタンスのデフォルト言語として選択した言語の、固有設定でセットアップされていることを確認してから、iSeries システムにログオンします。
 - b. 次のようなコマンドを入力して QShell セッションを始動します。

```
STRQSH
```

さらに、QShell セッションで次のようにします。

- 1) 以下のコマンドを発行して WebSphere Commerce サーバー bin ディレクトリーに切り替えます。

```
cd WC_installdir/bin
```

WC_installdir のデフォルト値は、v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

- 2) 以下のコマンドを発行して、構成マネージャー・サーバー・プログラムを開始します。

```
config_server.sh [-port server_port_number]
```

-port パラメーターはオプションです。このパラメーターを指定しないと、デフォルト・パラメーターである 1099 が使用されます。構成マネージャー・サーバーは、このポート番号を使用して listen します。

server_port_number を指定する場合、1024 ~ 65535 の間で、なおかつ iSeries システムで現在使用されていない値にしなければなりません。

注: インスタンスの作成で使用する言語と同じでない 1 次言語をもつシステムを使用する場合、*QSYSlanguage_feature_number* ライブラリーをユーザー・プロファイルのライブラリー・リストに追加する必要があります。そうしない場合、プロファイルは QSYS の下でそのライブラリーを見つけ出そうとします。言語機能ライブラリーを追加するには、EDTLIBL コマンドを使用します。

構成マネージャーをはじめてシステムで実行すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/ConfigManager.JAR.
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommercePayments/V55/wc.mpf.ear/lib/ibmjsse.JAR1
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/Utilities.JAR.
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/Enablement-BaseComponentsLogic.JAR.
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/jtopen.JAR.
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/xerces.JAR.
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/sslite.ZIP.
```

¹ この行は、WebSphere Commerce Payments が WebSphere Commerce と同じノードにインストールされる場合にのみ表示されます。

次のようなメッセージが通知されたら、次のステップに進みます。

```
Registry created.
CMServer bound in registry.
```

2. 構成マネージャー・クライアントをインストールした Windows マシンで、構成マネージャー・クライアントを始動します。

- a. 構成マネージャー・クライアント・マシンでコマンド・プロンプトを使って、`cfgmgr_installdir/bin` ディレクトリーに移動します。
- b. 次のようなコマンドを実行して、構成マネージャー・クライアントを始動します。

```
configClient.bat -hostname iSeries_Host_name [-port server_port_number]
```

詳細は次のとおりです。

iSeries_Host_name

構成マネージャー・サーバーが実行されている iSeries サーバーの完全修飾ホスト名です。

server_port_number

構成マネージャーが listen している iSeries サーバーのポート番号です。このパラメーターは、1099 以外のポート上の構成マネージャー・サーバーに接続する場合にのみ必要です。

- c. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。

Windows での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

Windows で WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動するには、次のようにします。

1. IBM WC 構成マネージャーが実行中であることを確認します。それには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択して、IBM WC 構成マネージャー・サービスが「開始」の状況になっているかどうかを調べます。

重要

IBM WC 構成マネージャー・サーバーのサービスを実行中のままにすると、セキュリティー上の問題を生じる可能性があります。構成マネージャーを使用しないときは、WC 構成マネージャー・サーバー・サービスを停止してください。

セキュリティー上の問題が起きないようにするには、IBM WC 構成マネージャーを自動ではなく手動で始動するように設定してください。

2. 「開始」→「IBM WebSphere Commerce」→「構成」を選択します。

WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止

WebSphere Commerce インスタンスを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. Web サーバーが始動済みであることを確認します。

3. 始動する WebSphere Commerce インスタンスで、アプリケーション・サーバーの始動、停止、または再始動を行います。アプリケーション・サーバーの始動および停止に関する説明は、123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止

WebSphere Commerce Payments インスタンスを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. Web サーバーが始動済みであることを確認します。
3. 構成マネージャーを始動します。構成マネージャーの始動に関する詳細は、117 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
4. **WebSphere Commerce** の構成マネージャーで、「*hostname*」→「**Payments**」→「**インスタンス・リスト**」の順に拡張表示します。
5. 始動または停止する WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前を右クリックし、以下のいずれかを行います。
 - WebSphere Commerce Payments インスタンスを始動するには、ポップアップ・メニューから「**Payments インスタンスの開始**」を選択します。「インスタンスが正常に始動されました (Instance started successfully)」ダイアログが表示されてから、「**OK**」をクリックして、ダイアログを消します。
 - WebSphere Commerce Payments インスタンスを停止するには、ポップアップ・メニューから「**Payments インスタンスの停止**」を選択します。

第 17 章 WebSphere Application Server のタスク

このセクションでは、WebSphere Commerce をインストールおよび管理する際に完了する必要のある、WebSphere Application Server タスクについて説明します。

アプリケーション・サーバーの始動および停止

アプリケーション・サーバーの始動または停止に関する説明は、ご使用のオペレーティング・システムによって異なります。

AIX、Linux、および Solaris オペレーティング環境 Linux でのアプリケーション・サーバーの始動または停止

アプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. 端末ウィンドウに次のようなコマンドを入力します。

```
su - non_root_user  
cd WAS_installdir/bin
```

non_root_user

WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非ルート・ユーザー ID。

WAS_installdir

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ディレクトリー。 *WAS_installdir* のデフォルト値は、*v* ページの『パス変数』に一覧で示されています。

3. 以下のいずれかを行います。
 - アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを入力します。

```
./startServer.sh application_server_name
```

- アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを入力します。

```
./stopServer.sh application_server_name
```

詳細は次のとおりです。

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。

アプリケーション・サーバー名	説明
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name_Commerce_Payments_Server</i>	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

OS/400 でのアプリケーション・サーバーの始動および停止

OS/400 でアプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようにします。

1. 次のようにして、WebSphere Application Server サブシステムの始動を確認します。

- a. OS/400 コマンド・セッションを始動します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

```
WRKSBS
```

- c. 表示されている実行中のサブシステムのリストで、以下のサブシステムが示されているか確認します。

```
QEJBAS5
```

実行中のサブシステムのリストで QEJBAS5 サブシステムが示されていない場合、アプリケーション・サーバーを始動する前に、そのサブシステムを始動しなければなりません。サブシステムの始動に関する詳細は、126 ページの『OS/400 WebSphere Application Server サブシステムの始動』を参照してください。

2. OS/400 コマンド行で以下を入力して、QShell セッションを始動します。

```
QSH
```

3. 以下のいずれかを行います。

- アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを発行します。

```
WAS_installdir/bin/startServer
-instance WAS_instance_name application_server_name
```

- アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを発行します。

```
WAS_installdir/bin/stopServer
-instance WAS_instance_name application_server_name
```

```
WAS_instance_name
```

アプリケーション・サーバーを始動する、WebSphere Application Server インスタンスの名前。デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスは *default* です。

デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスで、アプリケーション・サーバーを始動する場合、*-instance server_name* パラメーターはそのコマンドのオプションです。たとえば、以下のコマンドを発行します。

/QIBM/ProdData/WebAS5/Base/bin/startServer *application_server_name*

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name</i> _Commerce_Payments_Server	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

Windows でのアプリケーション・サーバーの始動および停止

Windows でアプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようになります。

1. 管理者権限をもった Windows ユーザー ID でログオンします。
2. コマンド・プロンプト・セッションを始動します。
3. 以下のコマンドを発行します。

```
cd WAS_installdir%bin
```

この *WAS_installdir* は、 WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ディレクトリーです。*WAS_installdir* のデフォルト値は、 v ページの『パス変数』に一覧で示されています。

4. 以下のいずれかを行います。
 - アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを入力します。
`startServer application_server_name`
 - アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを入力します。
`stopServer application_server_name`

詳細は次のとおりです。

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name</i> _Commerce_Payments_Server	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

WebSphere Application Server 管理コンソールの始動

デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動してから、 WebSphere Application Server 管理コンソールを始動できます。詳細は、 123 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

Web ブラウザーをオープンして以下の URL を入力して、 WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

`http://hostname:port/admin`

または

`https://hostname:port/admin`

ただし *hostname* は、 WebSphere Application Server を実行しているマシンの完全修飾の TCP/IP 名、 *port* は、 WebSphere Application Server 管理コンソールの TCP/IP ポートです。

WebSphere Application Server 管理コンソールのデフォルト・ポートは、 URL で指定されているプロトコルによって異なります。 HTTP の場合、デフォルト・ポートは 9090 です。 HTTPS の場合、デフォルト・ポートは 9043 です。

OS/400 WebSphere Application Server サブシステムの始動

使用するユーザー・プロファイルには、 WebSphere Application Server サブシステムを始動するために *JOBCTL 権限が必要です。

iSeries で WebSphere Application Server サブシステムを始動するには、次のようにします。

1. TCP/IP を始動します。 OS/400 コマンド行で次のようなコマンドを発行します。

STRTCP

2. OS/400 コマンド行で次のようなコマンドを実行して、QEJBAS5 サブシステムを始動します。

STRSBS SBSD(QEJBAS5/QEJBAS5)

デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスが自動的に始動します。デフォルト・アプリケーション・サーバー・インスタンスは *server1* です。

第 10 部 付録

付録. 詳細情報の入手方法

WebSphere Commerce システムとそのコンポーネントに関するさらに詳しい情報は、さまざまな形式でさまざまな情報源から入手できます。ここでは、利用できる情報と利用方法を示します。

WebSphere Commerce の情報

WebSphere Commerce の情報源は、以下のとおりです。

- WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ
- WebSphere Commerce Technical Library

WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ

WebSphere Commerce のオンライン情報は、WebSphere Commerce のカスタマイズ、管理、および再構成に関する主要な情報源です。WebSphere Commerce をインストールしたら、以下の URL を入力することによってオンライン情報のトピックにアクセスできます。

`https://host_name:8000/wchelp/`

この `host_name` は、WebSphere Commerce のインストール先マシンの完全修飾ホスト名です。

WebSphere Commerce Technical Library

WebSphere Commerce Technical Library は、以下の URL で利用できます。

`http://www.ibm.com/software/commerce/library/`

このマニュアルのコピー、およびこのマニュアルの更新されたバージョンは、WebSphere Commerce Web サイトの Library のセクションから PDF ファイルの形式で入手できます。さらに、この Web サイトから、新規および更新された文書を入手することができます。

WebSphere Application Server

WebSphere Application Server に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

`http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html`

WebSphere Application Server Network Deployment

WebSphere Application Server Network Deployment に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

`http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html`

WebSphere Application Server Edge Component

WebSphere Application Server Edge Component に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>

その他の IBM 資料

ほとんどの IBM 資料は IBM 認定販売業者あるいは営業担当員から購入することができます。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、米国以外の国においては本書で述べる製品、サービス、またはプログラムを提供しない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Canada Ltd.
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
Canada*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX	CrossWorlds	DataJoiner
DataPropagator	DB2	DB2 Universal Database
Domino	@server	IBM
iSeries	Lotus	MQSeries
Notes	OS/400	pSeries
QuickPlace	S/390	Sametime
SecureWay	Tivoli	WebSphere
xSeries	zSeries	

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows および Windows NT は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。